

屋 敷 添

県営圃場整備事業に伴なう縄文時代中期、後期
及び平安時代の集落遺跡の発掘調査報告書

1993

山梨県明野村教育委員会
峡北土地改良事務所

や
屋
敷
添
しき
そえ

県営圃場整備事業に伴なう縄文時代中期、後期
及び平安時代の集落遺跡の発掘調査報告書

1993

山梨県明野村教育委員会
峡北土地改良事務所

序

塗敷添遺跡は、平成3年6月より明野村内での圃場整備工事に先がけて発掘調査されました。現在、遺跡が立地した場所は整然と区画された美田となり、人々の糧を得る生産の場と生まれ変っております。

本文中にも報告されているとおり、本遺跡からは、縄文時代中期、後期及び平安時代の人々が残した貴重な遺構・遺物が数多く発見されております。特に石・石器が円形に並んで出土した34号住居跡は、縄文時代の住居の変遷をたどるうえで重要な発見と聞いております。また、平安時代の集落は、当村にかつてあったとされる穂坂の牧の実像に更に一步近づくための基礎資料となることでありましょう。県内でも稀な出土例である磨製石庖丁も出土しております。

先人達の数千年の歴史を物語る遺跡も、既に美田となり、消え去りました。残念なことではありますが、遺跡を無にすることなく、研究、社会教育に活用すると共に、現在、未来の私達の姿を考えるすべにすることは、私達に与えられた重大な課題であるといえましょう。本報告書がそうした課題に少しでも役に立つことを願って止みません。

最後に発掘調査にあたっては、多くの方々に御迷惑をおかけしました。お詫び申し上げるとともに、御協力に深く感謝いたします。また夏の炎天下、冬の八ヶ岳おろしに身をさらしながらの発掘作業に携わった方々にも心から感謝いたします。

平成5年3月31日

明野村教育委員会教育長 深澤正彦

例　　言

1 本書は、山梨県北巨摩郡明野村上千字屋敷跡（やしきぞえ）3,544他、に所在した尾敷添遺跡の発掘調査報告書である。

尚、本遺跡の縄文時代の遺構・遺物については、写真概報にとどめ、整理作業終了後に、改めて正式に報告する予定である。

2 発掘調査は、1991年6月3日より、1992年1月初旬まで現地での調査を行ない、1993年3月現在、遺物の整理作業を継続している。

3 発掘調査にあたった組織は次のとおりである。

調査主体 明野村教育委員会 教育長 長山博徳・深澤正彦（'92年10月より）

調査担当者 佐野隆（明野村教育委員会文化財係）

調査員 小宮山隆（筑波大学歴史・人類学研究科）

調査補助員 新津重子（早稲田大学卒）

調査事務局 明野村教育委員会

4 本書の執筆・編集は佐野が行った。遺構・遺物の大測・トレースは佐野・小宮山・新津・吉田が行った。49図、50図は、中森敏晴（筑波大学地域研究科）が作成した。また本書中の遺物写真は、佐野及び小松原俊一が撮影した。

5 発掘調査及び本書の作成にあたって次の方々に多くの指導・教示をいただいた。記して感謝したい。（敬称略）

新津健・瀬田正明・中山誠二・保坂康夫・山路恭之助・山下孝司・岐北土地改良事務所・山梨県文化課・山梨県埋蔵文化財センター・（財）山梨文化財研究所・㈱シン技術コンサル

6 本書の挿図は以下のとおりに作成した。

(1) 遺構については1/60、遺物については1/3縮尺を基本とし、それ以外の場合については、各図中に示した。

(2) 遺構実測図中の水系高は海拔高（m）である。

(3) 住居跡実測図中の網目は焼土範囲を表わし、一点鎖線は、固くしまった床面が検出された範囲を示している。

(4) 遺物実測図のうち、土器断面に縞があるものは灰釉陶器を示し、空白のものは、土師器を表す。土器内外面の黒色処理は網目で示してある。

7 本遺跡の出土品及び諸記録は全て、明野村教育委員会が保管している。

調査参加者

青柳均、阿部恵子、石渡節子、上野如子、大崎茂樹、大崎喜久江、黒田真理子、與水辰子、小松原千津、五味善彦、坂木富美子、坂本雅央、佐野利枝、篠原愛子、篠原さかえ、篠原友子、篠原啓子、清水昭子、清水恵三子、清水小春、清水さゆり、清水祐圭、鈴木昌子、須藤和男、筒井つや子、仲沢トミ、西川大、入戸野きぬよ、入戸野たかじ、入戸野つるじ、入戸野朝夫、入戸野宏、入戸野フサ子、入戸野みづ子、野中須真子、馬場登久子、堀内三千子、福山さつき、松山恵美、水森廣徳、三井ツヤ子、三井トモ子、三塙テツ子、皆川一子、宮川寛、守屋真弓、吉田光男

本文目次

序 例 言

| | | |
|------|----------------|----|
| 第1章 | 遺跡をとりまく環境 | 1 |
| 1 | 遺跡の地理的環境 | 1 |
| 2 | 遺跡の歴史的環境 | 3 |
| 第2章 | 調査にいたる経緯と発掘経過 | 5 |
| 第3章 | 平安時代の遺構と遺物 | 9 |
| 1 | 住居跡と出土遺物 | 9 |
| 2 | その他の遺構と出土遺物 | 45 |
| 3 | 遺構外出土遺物 | 47 |
| 第4章 | 縄文時代の遺構と遺物(概報) | 49 |
| 1 | 配石遺構 | 49 |
| 2 | 住居跡 | 52 |
| 3 | 土坑 | 54 |
| 4 | 出土遺物 | 56 |
| 参考文献 | | 60 |
| 卷末図版 | 折込図版2枚 | |

挿図目次

| | | | | | |
|------|----------------|----|------|----------------|----|
| 第1図 | 明野村内の湧水地 | 1 | 第26図 | 17号住居跡 | 30 |
| 第2図 | 遺跡周辺の地形概念図 | 2 | 第27図 | 17号住居跡遺物 | 31 |
| 第3図 | 周辺の遺跡 | 4 | 第28図 | 19号住居跡 | 32 |
| 第4図 | 基本層序 | 5 | 第29図 | 20号住居跡 | 33 |
| 第5図 | 調査区域と包蔵地範囲 | 6 | 第30図 | 20号住居跡遺物 | 34 |
| 第6図 | グリッド配図図 | 7 | 第31図 | 21号住居跡 | 35 |
| 第7図 | 3号住居跡 | 9 | 第32図 | 22号住居跡 | 36 |
| 第8図 | 3号住居跡遺物 | 10 | 第33図 | 23号住居跡 | 37 |
| 第9図 | 4号住居跡 | 12 | 第34図 | 23号住居跡遺物 | 37 |
| 第10図 | 4号住居跡遺物 | 13 | 第35図 | 24号住居跡 | 38 |
| 第11図 | 6号住居跡 | 14 | 第36図 | 24号住居跡遺物 | 39 |
| 第12図 | 7号住居跡 | 15 | 第37図 | 27号住居跡 | 40 |
| 第13図 | 7号住居跡遺物 | 16 | 第38図 | 27号住居跡遺物 | 40 |
| 第14図 | 9号住居跡 | 18 | 第39図 | 28号住居跡 | 41 |
| 第15図 | 9号住居跡遺物 | 19 | 第40図 | 28号住居跡遺物 | 43 |
| 第16図 | 10号住居跡 | 20 | 第41図 | 29・32・33号住居跡 | 43 |
| 第17図 | 10号住居跡遺物 | 21 | 第42図 | 30・31号住居跡 | 44 |
| 第18図 | 12号住居跡 | 22 | 第43図 | 31号住居跡遺物 | 44 |
| 第19図 | 12号住居跡遺物 | 22 | 第44図 | 方形整穴状遺構 | 46 |
| 第20図 | 13号住居跡 | 25 | 第45図 | 遺構外出土遺物 | 47 |
| 第21図 | 13号住居跡遺物 | 25 | 第46図 | 遺跡周辺出土石棒 | 55 |
| 第22図 | 14号住居跡 | 26 | 第47図 | 16号住居跡出土石棒 | 56 |
| 第23図 | 14号住居跡遺物 | 27 | 第48図 | 6号配石出土スタンプ形土製品 | 57 |
| 第24図 | 15号住居跡・炬形整穴状遺構 | 28 | 第49図 | 9号配石出土石皿 | 58 |
| 第25図 | 15号住居跡遺物 | 29 | 第50図 | 遺跡周辺出土石皿 | 59 |

図版目次

| | | | | | |
|------|-------------------------------|----|------|-------------------------|-----|
| 図版1 | 遺跡遠景 | 63 | 図版25 | 4号配石 | 87 |
| 図版2 | 遺跡近景 | 64 | 図版26 | 6号配石 | 88 |
| 図版3 | 3号住居跡及び遺物 | 65 | 図版27 | 8号配石 | 89 |
| 図版4 | 4号住居跡及び遺物 | 66 | 図版28 | 9号配石 | 90 |
| 図版5 | 6号住居跡及びカマド | 67 | 図版29 | 10号、11号配石 | 91 |
| 図版6 | 7号住居跡及び遺物 | 68 | 図版30 | 12号、13号配石 | 92 |
| 図版7 | 9号住居跡及び遺物 | 69 | 図版31 | 14号配石 | 93 |
| 図版8 | 10号住居跡及び遺物 | 70 | 図版32 | 環状遺構 | 94 |
| 図版9 | 12号住居跡及び遺物 | 71 | 図版33 | 16号、17号配石 | 95 |
| 図版10 | 13号住居跡及び遺物 | 72 | 図版34 | 19号、20号配石 | 96 |
| 図版11 | 14号、15号住居跡 | 73 | 図版35 | 1号敷石住居跡 | 97 |
| 図版12 | 15号住居跡遺物、17号住居跡及び 17号住居跡遺物 | 74 | 図版36 | 2号敷石住居跡 | 98 |
| 図版13 | 20号住居跡及び遺物 | 75 | 図版37 | 3号敷石住居跡及び11号住居跡 | 99 |
| 図版14 | 19号、21号住居跡 | 76 | 図版38 | 16号、25号住居跡 | 100 |
| 図版15 | 22号住居跡及び17号、20号、22号 住居跡カマド | 77 | 図版39 | 34号住居跡 | 101 |
| 図版16 | 23号住居跡及び遺物 | 78 | 図版40 | 2号、3号上坑 | 102 |
| 図版17 | 24号住居跡及び遺物 | 79 | 図版41 | 85号、336号土坑 | 103 |
| 図版18 | 27号住居跡及び遺物 | 80 | 図版42 | 344号土坑 | 104 |
| 図版19 | 28号住居跡カマド及び遺物 | 81 | 図版43 | 339号、349号土坑 | 105 |
| 図版20 | 方形竪穴状遺構 | 82 | 図版44 | 350号、352号上坑 | 106 |
| 図版21 | 遺構外出土遺物 | 83 | 図版45 | 34号住居跡内土坑、34号住居跡南 土坑 | 107 |
| 図版22 | 1号配石 | 84 | 図版46 | 绳文時代中期の土器 | 108 |
| 図版23 | 2号配石 | 85 | 図版47 | 绳文時代中期末から後期の土器 | 109 |
| 図版24 | 3号配石 | 86 | 図版48 | 出土石製品及びスタンプ形土製品 | 110 |
| | | | 図版49 | 調査区内の石造物と調査参加者 | 111 |

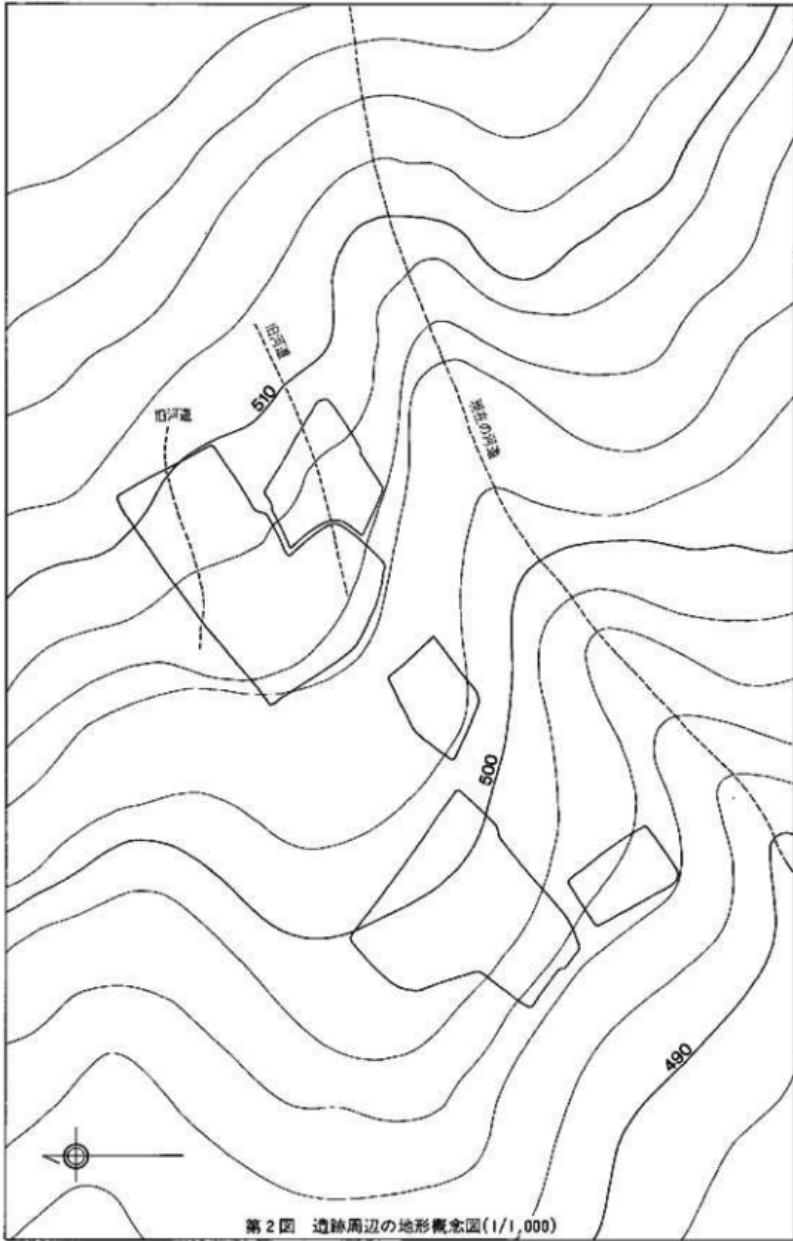
第1章 遺跡をとりまく環境

1 遺跡の地理的環境（第1、2図）

明野村は東に茅ヶ岳、金ヶ岳という死火山（標高1703m、1764m）を臨み、西は秩父山系より流れ出る塩川の断崖により区画された南北15km、東西8kmほどの山麓に位置する。村内には、両山に発する小河川が形成した谷が東西に数多く走っているが、現在、水流のある河川は、北から



第1図 明野村内の涌水地（●印） ○印は、堀戸窯造路（1/60,000）



第2図 造跡周辺の地形概念図(1/1,000)

湯沢川、柄沢川、正乗寺川しかない。いずれも小河川であり、古来、農業用水の便に苦しんだ土地である。しかし、第1図に示したとおり、茅ヶ岳山麓には、南北に連なる湧泉列があり、そのうちの幾つかは現在も清水を湛えている。星敷添遺跡は、村内の他の遺跡と同様、東西に走る谷と谷にはさまれた尾根上に位置し、周辺に湧水地が存在する。星敷添遺跡南側の谷は、現在、用水路として使用されているといえ、水流があり、現比高差は7~8mほどある。調査区域内にも縄文時代中期以前の旧河川が2筋あり（第2図）、かつては、こうした谷に水流があり、利用できたものと考えられる。

標高505m前後に位置する遺跡の潜在植生は、シナノキ群落、ハンノキ群落と推定され¹⁾、現在は水田及び畑地となっている。

註 1) 宮脇昭ほか、1977『山梨県植物図』 山梨県

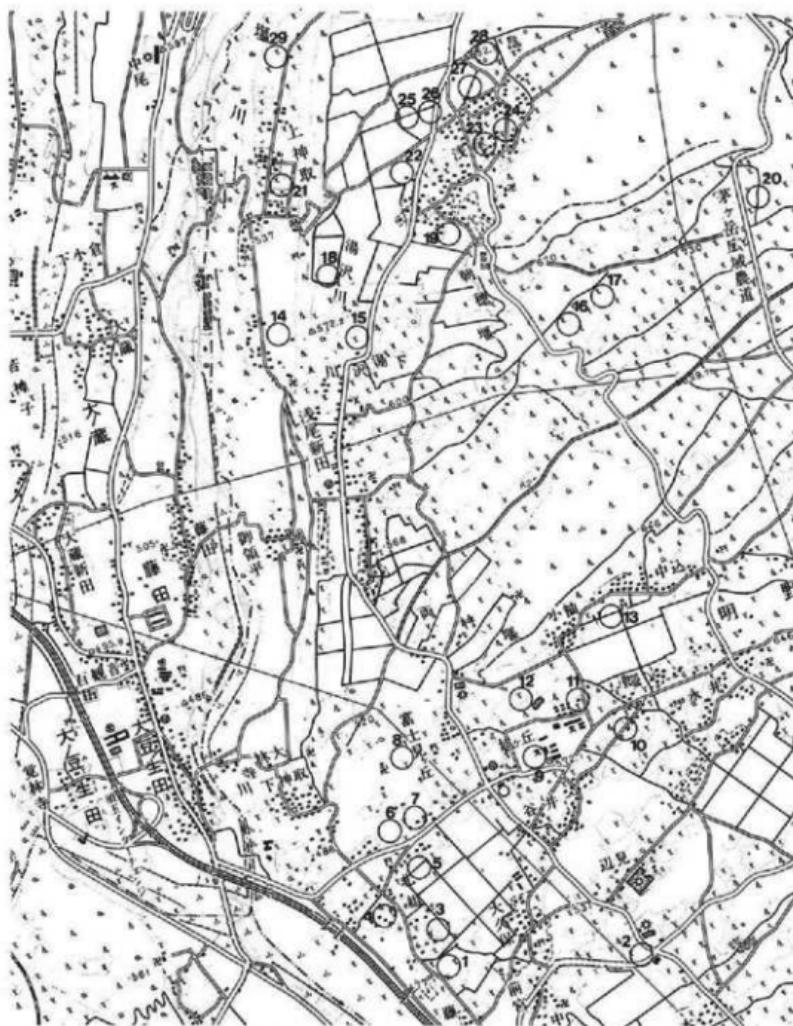
植松春雄ほか、1981『山梨県植物誌』 山梨県農林生活局環境公害課

2 遺跡の歴史的環境（第3図）

星敷添遺跡の周辺には縄文～平安時代までの遺跡が多くみられる。そのうち、縄文時代中期から後期にかけての遺跡をみると、本遺跡から東に約1kmの範囲に清水端遺跡（後期初頭～中葉）、平林遺跡、高台・中谷井遺跡（中期末葉）、東西に駒飼場遺跡（中期末葉）がある。特に清水端遺跡は本遺跡と同時期に並存していた可能性もあり、両者の関係は興味があるところである。一方、平安時代に目を転じると、下反保遺跡、高台・中谷井遺跡、村之内II・III遺跡、神取遺跡がある。遺跡から北へ500mほどにある宇波刀神社には貞觀六年（864）の銘をもつ石鳥居がある。²⁾明野村は、9世紀頃より勅旨牧が置かれたらしく、穂坂の牧、その後進の小笠原の牧に関する史跡がいくつかみられる。村内の平安時代の遺跡も、こうした背景抜きでは評価できないであろう。今後、牧と集落についての分析がなされねばならない。

註 (1) 宮沢公雄 「清水端遺跡」 明野村教育委員会 1986

(2) 「明野村誌」 明野村役場 1963



第3図 周辺の遺跡 (1/25,000)

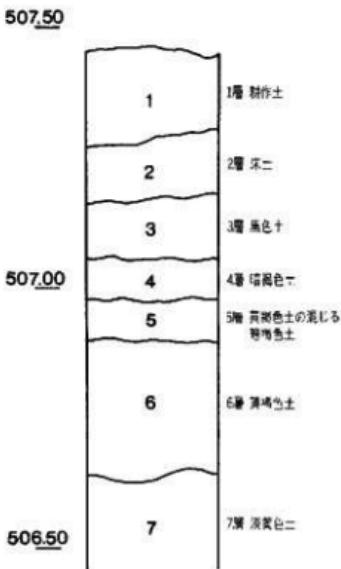
1星敷添 2金山 3千野木II 4下反保 5千野木I 6村之内II・III 7三井氏屋敷跡 8桑森 9平林南II
10高台・中谷井 11平林・平林南 12清水塙 13善門寺 14寺前 15白山II 16経塙 17富士塙 18白山I 19踏石II 20梅の木 21星代氏屋敷跡 22茶師堂 23竹内 24鐵石 25池の下 26中村道祖神 27宮後 28吉良窪 29源訪原

第2章 調査にいたる経緯と発掘経過

1980年より村内で実施されている県営圃場整備事業が、1991年、遺跡の所在する北組工区を対象として行われることとなった。そのため、明野村教育委員会では1989年12月に工区全域で埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査を行った。遺跡の所在は以前から知られていたため、この試掘調査は主に発掘調査範囲を決定するために行った。圃場整備工事は遺跡の東側約ほどに及んでいるが、将来、西側の、現在畠地となっている範囲（第5図中、縦目で囲んだ範囲）に開発が計画される際には、改めて調査が必要である。

試掘調査の結果を受けて、明野村教育委員会では候北土地改良事務所、山梨県文化課と協議し、1991年6月より発掘調査を実施することとした。遺跡は東西に細長く延びているが、一部に圃場整備工事工区外地を含んでいるため、遺跡全体に单一のグリッド（10m×10m）を設定し調査することとした。これら工区外地をいずれ発掘する場合には、今回のグリッドを延長することで対応することができる。

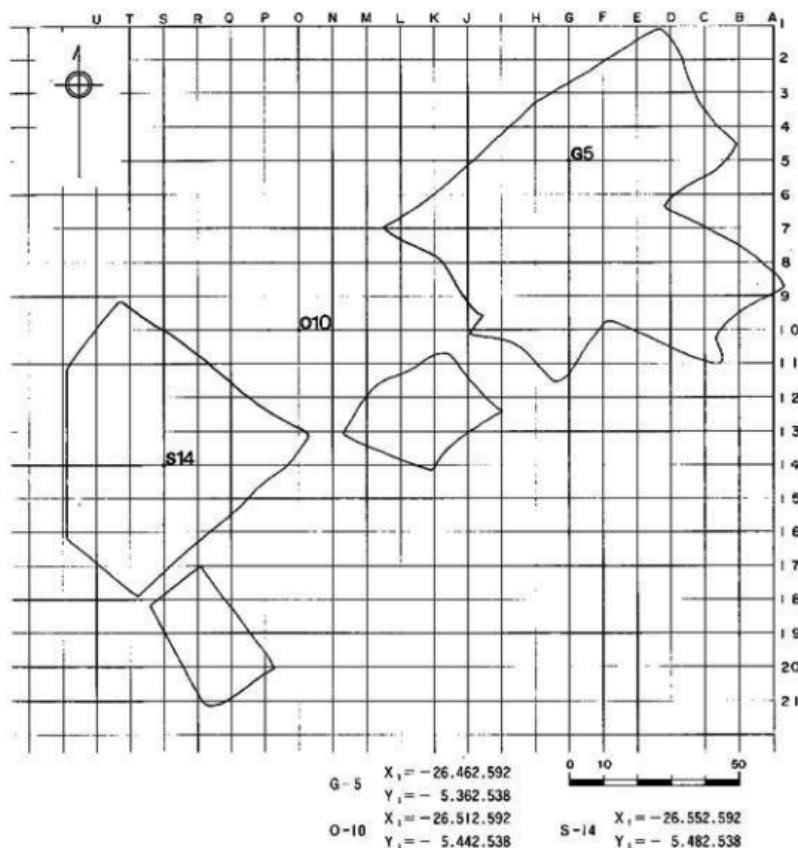
グリッドは東西方向に東よりA-U、南北方向に北より1~20まで設定した（第6図）。重機



第4図 基本層序



第5図 調査区域と包廃地範囲 1/2,000
アミは調査区域
シマ目の囲みは包廃地



第6図 グリッド配置図 座標値は第III系による。

による表土剝除は、1991年6月初旬より始まり、調査を開始したが、進行につれて、試掘調査では予想されなかつ繩文時代後期と思われる配石遺構が次々と現れた。そのため、調査期間の延長、調査計画の変更が必要と判断し、文化課・岐北土地改良事務所と再度、協議のうえ、これについて合意した。遺跡調査のために地元の方々を始め、関係機関に多くの迷惑が及んだことと思うが滞りなく調査を終了できたことを感謝したい。

現地での発掘調査は'92年1月、降雪のなか、最後の実測図が完成し、終了した。以後、現在まで遺物の整理作業を行っている。調査の途上、地元施工区の方々に文化財保護の主旨を理解していただけたよう、2度にわたり遺跡見学会を催した。多忙の折、参加して下さった多くの方々

に改めて御礼申し上げたい。

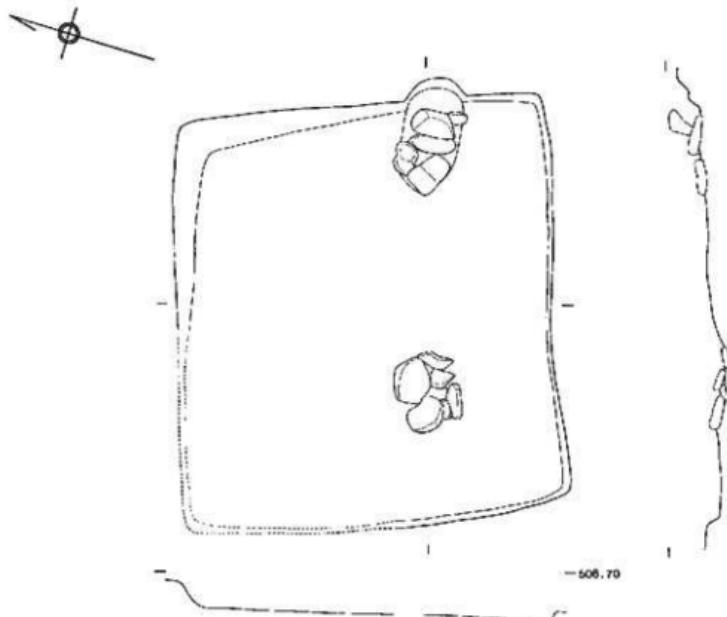
遺跡の基本層序は第4図に示した。扇状地であるうえに、遺跡内に旧河道が通り、場所により各層の厚さがずい分変化していた。1～2層は耕作土及び床上、3層の黒色土中で平安時代及び縄文時代後期の遺構・遺物が出土した。4層、5層では縄文時代中期の遺構・遺物が出土したが、場所により、黒色土での遺構確認が困難なため、4層にまで掘り下げて遺構確認を行った。縄文時代後期の遺構については上坑等の検出に努めたが、黒色土であったため万全であったかどうか、不安が残る。

第3章 平安時代の遺構と遺物

1 住居跡と出土遺物

本遺跡では、縄文時代・平安時代を合わせ34号までの住居跡ないしそれと思われる遺構を検出したが、住居跡と断定できないものもあり、ここでは平安時代・23軒を報告する。遺物の時期、形式については、甲斐型土器研究グループ¹⁾の編年分類に依拠した。

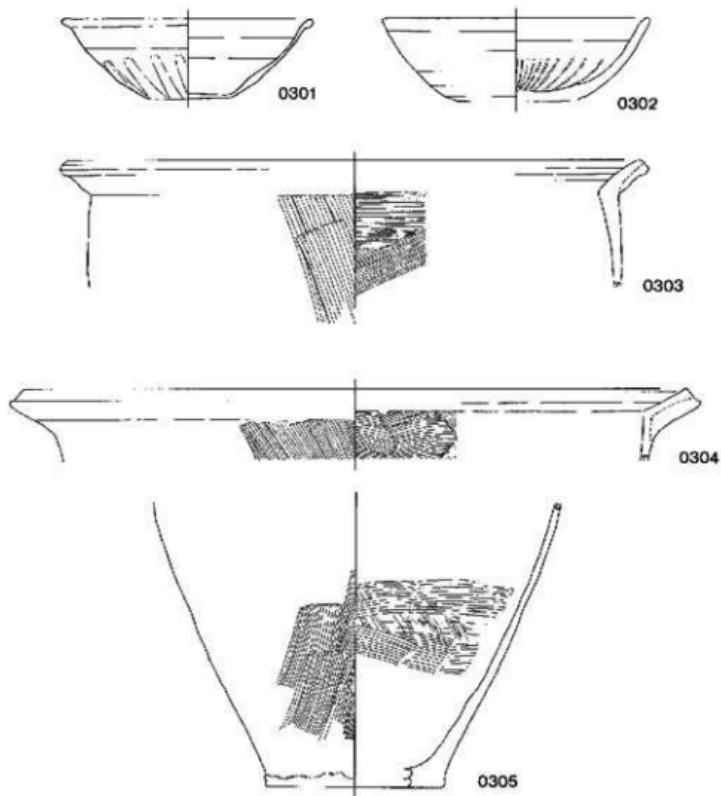
註1) 甲斐型土器研究グループ 1992「甲斐型土器—その編年と年代—」 山梨県考古学協会



第7図 3号住居跡 (1/60)

3号住居跡 (第7・8図、図版3)

G7グリッドに位置する。長軸4.2m×短軸3.7mのはば正方形の住居跡で、壁高は20cmほど残存していたが、北西隅は造田の際、削平され輪郭を確認できなかった。周溝、柱穴は検出されず、



第8図 3号住居跡遺物 (1/3)

堅固な床面も点在する程度であった。

カマドは東壁、中央よりやや南寄りに位置し、石組のみが残存していた。焼土と炭の混じった上がカマド石組の下より検出されたが僅かであった。住居跡中央西寄りにも石組があり、焼けて赤変していたが、周囲に焼土等はみられなかった。カマドの石組が移動したのかも知れない。

8図0301は、床面出土上の土師器坏で、口径12.4cm、器高4cm、底径4.2cm。胎上は赤粒子を含む赤褐色の土である。外面はロクロナデ、外面下半部は斜めヘラケズリにより整形されている。内面はロクロナデのみ、底部は糸切後、ヘラケズリされている。

0302も、同じく床面出土上の土師器坏で、口径13.2cm、器高4.1cm、底径5.8cm。胎上は僅かに赤

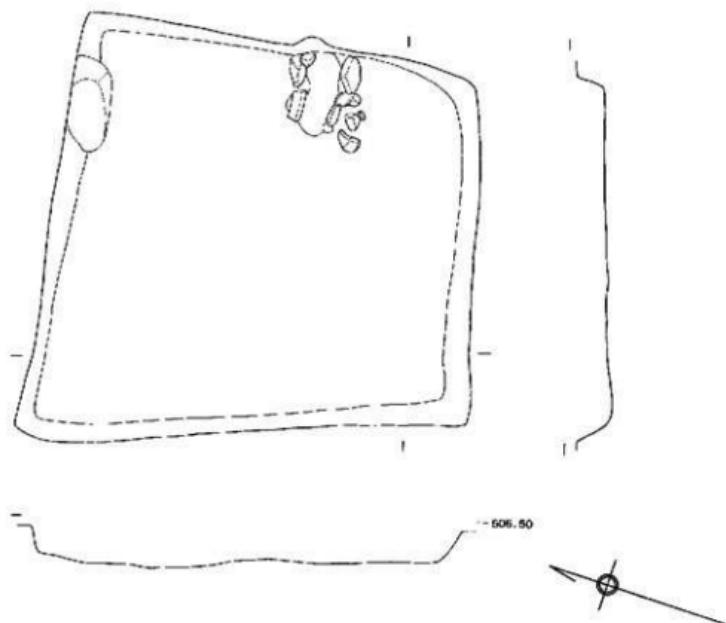
粒子が混じり、長石粒子が目立つ赤褐色の土である。整形は外面がロクロナデ、内面はロクロナデに黒色処理、放射状暗文が施されている。底部は糸切りである。

0303は、床面出土の土師器甕で、推定口径28.8cm、口縁部は厚口縁型である。胎土は金雲母、黒雲母、長石、石英の粒子が混じる暗赤褐色の土である。外面は縱方向のハケメ、内面は横方向のハケメで調整されている。

0304も床面出土の土師器甕で、0303と同様の胎土質である。推定口径32.5cm、厚口縁型である。0305は0304と同一個体と思われる。

以上その他、数個体の土師器環片、須恵器片、灰釉陶器片が覆土上及び床面より出土したが、小破片であるため報告は省略する。

3号住居跡は床面出土の甕、甕から、甲変型土器編年のX～XII期、9世紀後半～10世紀中頃までに属すると推測される。



第9図 4号住居跡 (1/60)

4号住居跡（第9・10図・図版4）

H6グリッドに位置する。3.8m×4.2mのややいびつな方形の住居跡である。柱穴、周溝は検出されなかつたが、全面にわたって堅固な床面が残っていた。

カマドは東壁の中央よりやや南寄りに位置し、石組の残存は良好であった。焼上はカマド掘り込みと煙道よりも多く検出された。

10図0401は、カマドに向かって右側の住居跡、壁際より出土した土師器環で、口径12cm、器高4.2cm、底径4.6cm。外面はロクロナデに下半部が斜めヘラケズリ、内面はロクロナデで調整され放射状暗文がみられる。みこみ部と体部の境界には溝状のへこみがある。底部は糸切り後、ヘラケズリされている。胎土は赤粒子を多く含む赤褐色の上である。

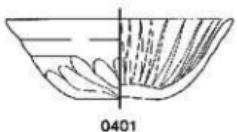
0402は、南壁際、床面より若干高い位置で出土した土師器環で、口径11.2cm、器高3.6cm、底径4.1cm。調整は外面がロクロナデ、下半部が斜めヘラケズリ、内面はロクロナデで放射状暗文が施されている。底部はヘラケズリである。胎土は赤粒子を多く含む赤褐色の上である。

0403は、カマド正面の床面より出土した土師器甕で、推定口径25cm、薄口縁型である。胎土は黒雲母、長石の粒子を多く含み、金雲母は殆ど混じらない暗赤褐色の土である。外面は斜め方向

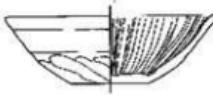
のハケメ調整、内面は横方向のハケメ調査が施されている。

0404は、覆土より出土した土師器底であるが、小型品なので報告しておく。推定口径は13.3cm。胎土は、長石、石英の粒子が目立ち、金芸母を僅かに含む暗褐色の土である。調整は外面が摩耗が進み不明瞭だが縦方向のハケメによるものと思われる。内面は横方向のハケメである。

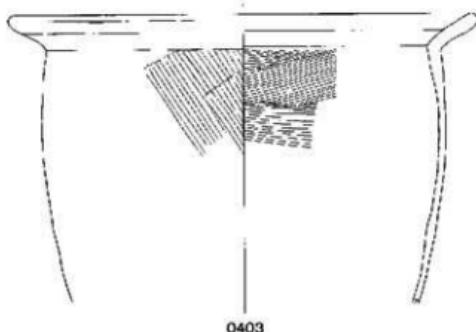
遺物は他に暗文をもつ土師器环が2個体、小破片で出土したがここでは省略する。4号住居は床面出土の遺物が少なく時期は断定できないが、IX～X期、9世紀中～後半頃と推測される。



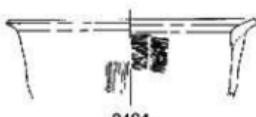
0401



0402

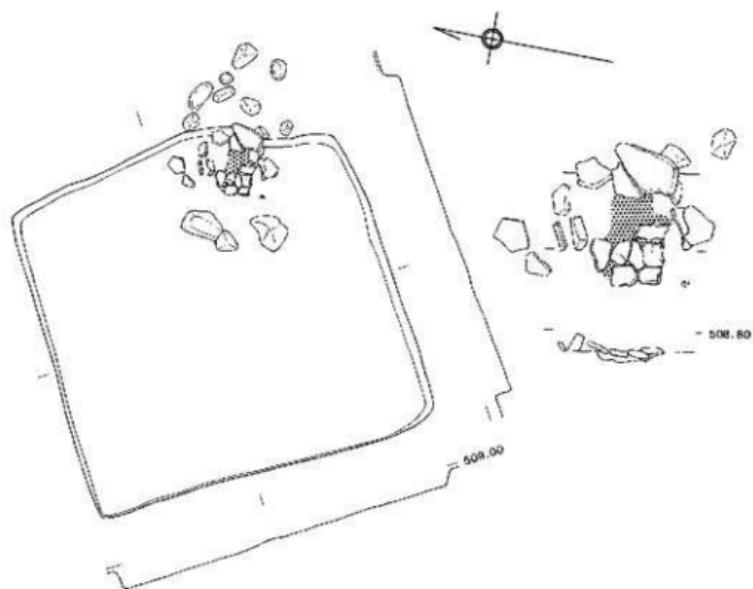


0403



0404

第10図 4号住居跡遺物 (1/3)



第11図 6号住居跡 (1/60)

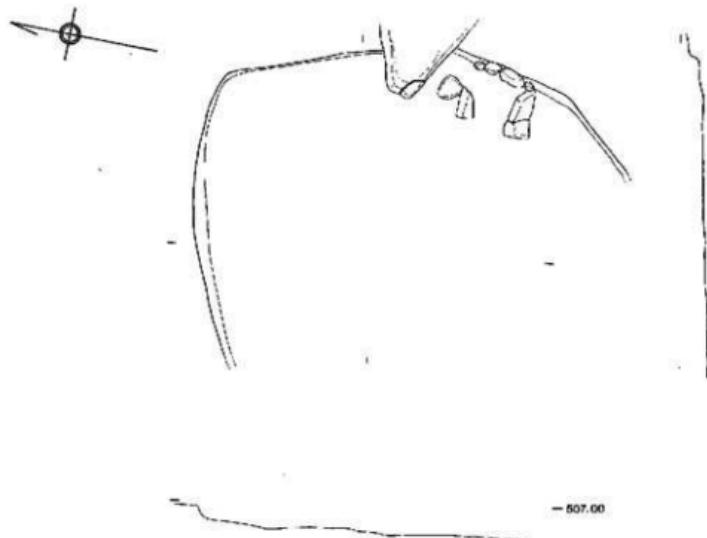
6号住居跡 (第11図、図版5)

C4グリッドに位置する。掘り込みが約10cmほど、残っていた。柱穴、周溝は検出されなかつた。堅固な床面も点在する程度であった。

カマドは東壁、中央よりやや南寄りにあり、石組が残存していた。カマドの焚口と思しき箇所には、平らな石が7枚敷かれており、その下から多量の焼土が検出された。

出土遺物は僅かで、原形を復原し得るような土器片は一片も見つからなかった。土師器皿の小破片は口縁が玉縁状に膨み、底部は糸切り後、ヘラケズリされている。カマド傍からはタタキ整形された須恵器甕の胴部片が出土している。

以上のような出土遺物であるため、住居の時期については平安時代ということ以上に推定することはできない。



第12図 7号住居跡 (1/60)

7号住居跡 (第12・13図、図版6)

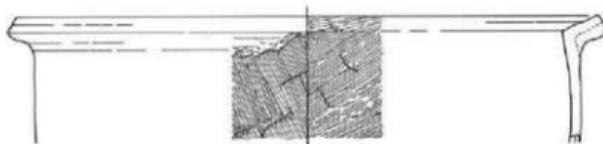
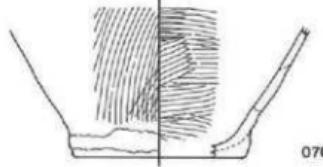
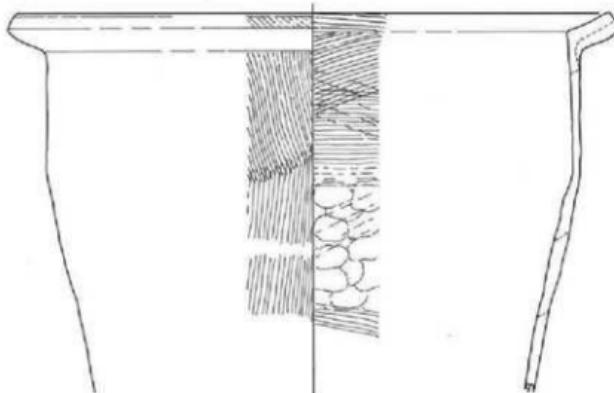
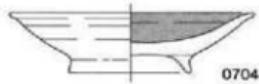
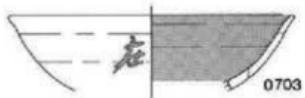
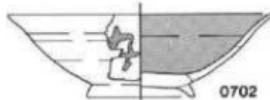
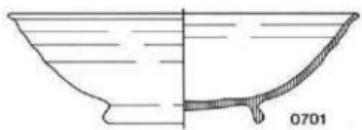
E7クリッドに位置する。住居西側半分は、水路及び水田で削平されてしまっている。推定4m×4.2mの方形の住居跡で、北壁側に周溝が検出された。カマドのすぐ北側には岩が住居内に突出しており平らに削られている。

カマドは東壁の中央よりやや南寄りに位置し、石組が残っていた。焼土がカマド内から検出された。

第13図0701は、北壁周溝近くの床面で出土した灰釉陶器で、口径18.7cm、器高5.9cm、底径8cmで、内外面ともロクロナデ整形されている。釉調は淡灰色で、内外面ともハケ塗りされている。焼成は良く、胎土は黒粒子が混じる緻密な粘土である。

0702は、カマド出土の土師器環で推定口径14cm、器高4.5cm、底径5.7cm。内外面ともロクロナデ整形され、内面は黒色処理されている。胎土は長石粒子を含む、やや砂質の土で、褐色である。甲変型環の胎土とは異なる。器形は灰釉陶器を模倣したものと思われる。「在」(在)の墨書がある。高台は糸切り後に貼付けたものである。

0703も0702と同様の胎土で、推定口径15.3cm。「在」(在)の墨書がある。底部は欠損してい



第13図 7号住居跡遺物 (1/3)

るが、灰釉陶器を模倣した器形と思われる。

0704も同じ胎土質で床面出上である。付高台をもつ土師器皿で口径13cm、器高3.2cm、底径3cm。内外面ともロクロナデ、みこみ部には指頭圧痕がみられる。内面は黒色処理されている。これも灰釉陶器を模倣した器形で、0702～0704は同じ生産地から搬入されたものと思われる。

0705はカマドから出土した土師器甕で、推定口径32.5cm、胎土は暗赤褐色で、金雲母、黒雲母、長石粒子が目立つ。外面は縱方向のハケメ、内面は横方向のハケメで調整されている。底部には木葉痕がある。口縁はかなり厚手の厚口縁型である。

0706は覆上出土であるが、0705と殆ど同じ大きさ、胎土質である。推定口径32cm、厚口縁型の土師器甕である。

7号住居跡は灰釉模倣品が多く、甲斐型環は小片のみしか出土していない特異な住居跡である。灰釉陶器や甲斐型甕から推測すると、X～XI期、9世紀後半～10世紀中頃にあたると思われる。

8号住居跡

F7グリッドに位置する。北東隅がかろうじて確認されたのみであるが、方形プランであることから、平安時代の住居跡と推測される。遺物は全く出土しなかった。

9号住居跡（第14・15図、図版7）

F8グリッドに位置する。5m×5.3mほどの方形の住居跡で床面は検出されなかった。住居中央に平たい石があったが、焼土粒子が散在する面よりもやや高い位置になる。

カマドは東壁、中央よりやや南寄りに位置し、石組と焼上が検出された。

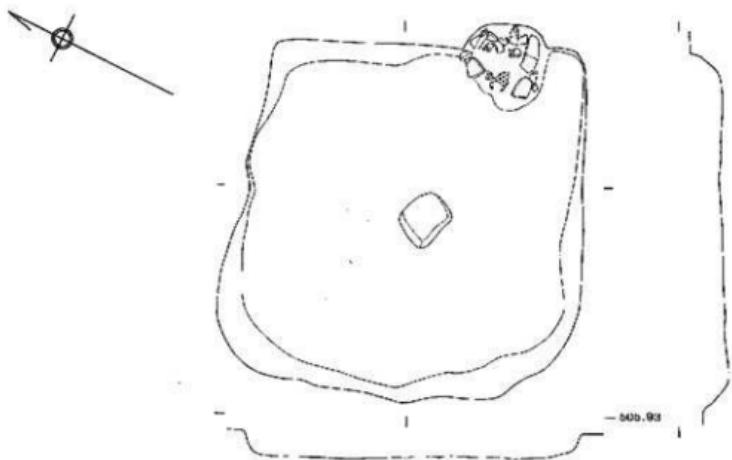
出土遺物は殆どが床面と思われる、焼土粒子が散在する面よりもやや高い位置から出土した。

0901の土師器環は、口径12.2cm、器高4cm、底径4.2cm。胎土は赤粒子の混じる赤褐色の土である。器体外面はロクロナデと斜めヘラケズリ、内面はロクロナデに放射状の暗文が施される。底部はヘラケズリされている。

0902の土師器環は、上部が欠損している。外面下半部は斜めヘラケズリされ、内面はロクロナデ、底部はヘラケズリされている。外面下半に墨書きがあるが欠損により判読できない。胎土は赤粒子の混じる赤褐色の土である。

0903の土師器環は、口径14.7cm、底部は欠損している。器体外面はロクロナデにヘラケズリ、内面はロクロナデで調整されている。内面は黒色処理され、放射状暗文がみられる。口縁は玉縁状に膨らむ。胎土は赤粒子が混じる赤褐色の土である。

0904の土師器環は、口径11.5cm、器高4.6cm、底径3.5cm。器体外面はロクロナデと斜めヘラケ



第14図 9号住居跡 (1/60)

ズリ、内面はロクロナデで整形されている。底部はヘラケズリされている。胎土は赤粒子の混じる赤褐色の土である。

0905の土師器皿は、口径13.5cm、器高2.1cm、底径7.2cm。内外面ともロクロナデ調整で、外面下半部は回転ヘラケズリが施され、ナデとヘラケズリの境界が稜を形成している。底部はヘラケズリ。胎土は赤粒子が僅かに混じる赤褐色の土である。

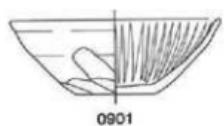
0906の土師器皿は、口径13.5cm、底部は欠損している。器体外面はロクロナデにヘラケズリ、内面はロクロナデで整形され、穂らしい段がみられる。胎土は長石、石英を多く含む橙色の土である。

0907はカマド出土の土師器甕で推定口径25cm、薄口縁型である。胎土は金雲母、長石粒子を多く含む明赤褐色の土である。器面調整は外面が縱方向のハケメ、内面が横方向のハケメによる。

0908もカマド出土の土師器甕で、推定口径28cm、薄口縁型で胎土は長石粒子、雲母が僅かに混じる赤褐色の土である。胴部中央の接合部には指顎圧痕がみられる。

0909は、覆土出土の土師器甕である。

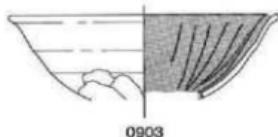
9号住居跡は、2つの甕以外、住居に直接属する遺物かどうかはつきりしない。そのため住居跡の年代も明言し難いが、概ねIX期～XI期、9世紀後半～10世紀前半頃と推測される。



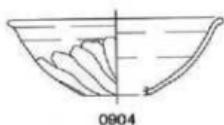
0901



0902



0903



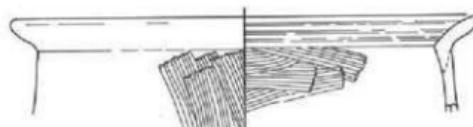
0904



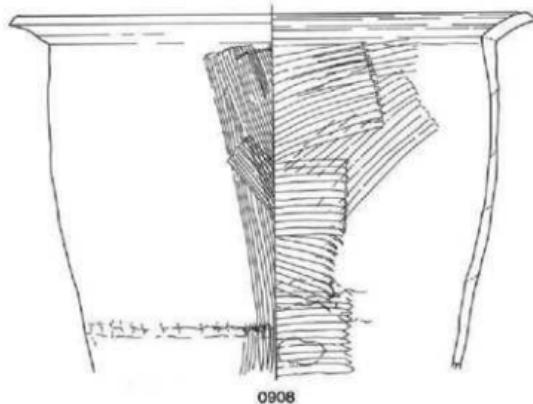
0905



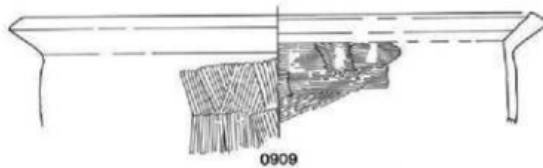
0906



0907

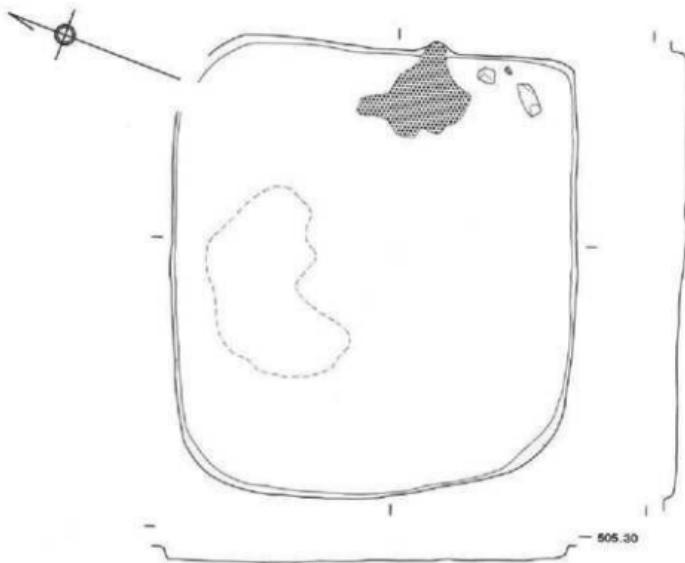


0908



0909

第15図 9号住居跡遺物 (1/3)



第16図 10号住居跡 (1/60)

10号住居跡 (第16・17図、図版8)

F 9グリッドに位置する。4.3m×4mの方形の住居跡で、確認面から床面まで20cmほどが残存していた。一部に床面が残っており、この床面と同じ高さで出土した遺物は床面遺物として取り上げた。

カマドは、東壁の中央よりやや南寄りに位置していたと思われる。石組も殆ど残らず、焼土と遺物が出土したことからカマドと判断した。

1001は床面出土の土師器環で、口径11.5cm、器高5.2cm、底径3.8cm。器面調整は外面がロクロナデにヘラケズリ、内面はロクロナデによる。内面には放射状暗文がみられる。底部はヘラケズリで、十字形の線刻らしきものがある。胎土は赤粒子を含む赤褐色の土である。

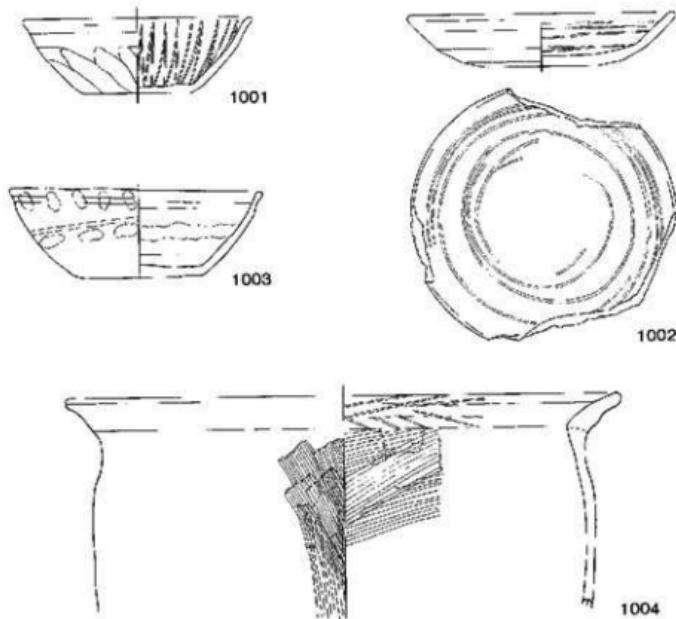
1002は、床面出土の土師器皿で、口径13.4cm、器高26cm、底径5.3cm。器体外面は上半がロクロナデ、下半部が横位のヘラケズリ、内面はロクロナデに満巻状暗文が施される。底部はヘラケズリで、1001と同じく十字形の線刻がみられる。内面はみこみ部と体部の境に、はっきりとした屈曲部がみられる。

1003はカマド出土の土師器環で、ロクロは使わず、手捏ねで成形されている。口径12.4~12.7

cm、器高4.1～4.5cm、底径6.3cm前後で、器体部には指頭による整型痕がみられる。胎土は長石、石英、雲母の粒子が目立つ赤褐色の土で、甲斐型窯の胎土質に良く似ている。

1004も床面出土で、推定口径28cmの土師器皿である。胎上は長石粒子が目立つ暗赤褐色の土で、口縁は薄口縁型と思われる。胴部外面は縱方向のハケメ、内面は横方向のハケメで調整される。

10号住居跡は、遺物から判断すると、IX-X期、9世紀後半頃と推測される。また、壺と皿の底部に十字形の線刻がみられたが、10号住居跡以外にこうした線刻が17号住居で出土している。意味するところは不明だが、焼成後に刻んでいることから所有者がつけたものとも考えられる。1003の手捏ね壺は、甲斐型窯と同質の胎土であることから、壺を製作した工人の手によるものかも知れない。



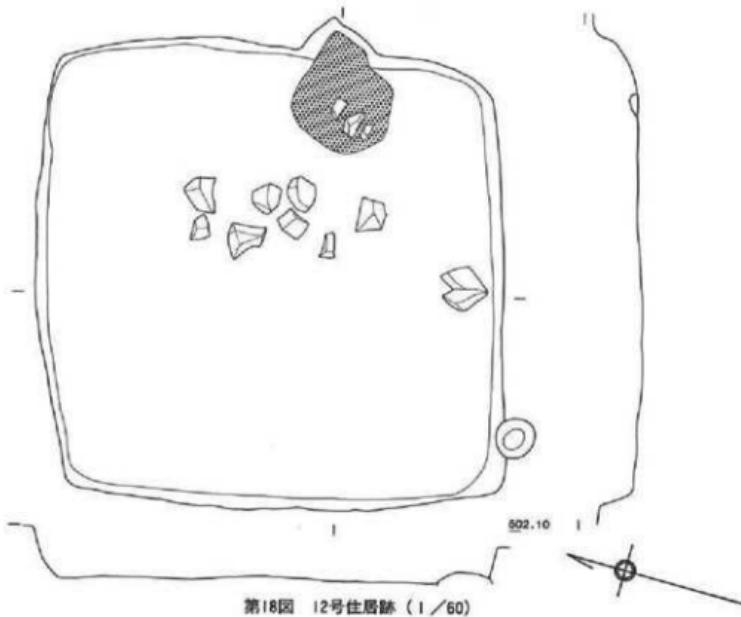
第17図 10号住居跡遺物

12号住居跡（第18・19図、図版9）

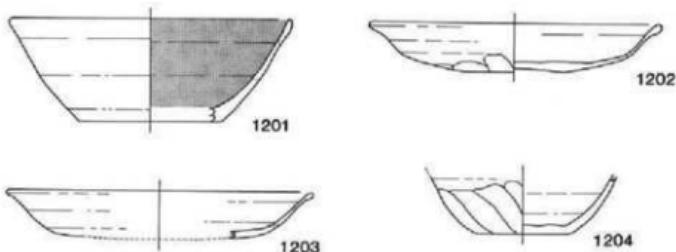
I 12グリッドに位置する。4.5m×4.6mの方形の住居跡で、掘り込みが50cmほど残っていた。床面は部分的に残存していたが、周溝・柱穴は確認できなかった。

カマドは東壁の中央よりやや南に寄った位置にあったと思われる。カマド石組らしきものと焼土・掘り込みが検出されたが、遺存状態は良くなかった。

床面はカマド周辺の焼土や、散在する堅固な部分から高さを推測したが、以下に報告する遺物は、こうして推測された高さ付近で出土したものである。



第18図 12号住居跡 (1/60)



第19図 12号住居跡遺物 (1/3)

1201の土師器は推定口径14cm、器高5.1cm、推定底径7cmで、胎土は石英粒子、雲母粒子を含む、灰白色のやや砂っぽい土である。器体外面はロクロナデにより調整され、内面は黒色処理されている。底部は回転糸切りのままである。

1202はカマド掘り込みより出土した土師器皿で、推定口径14.5cm、器高2.4cm、推定底径4.8cm。器体外面はロクロナデに下半部は回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリ、内面はロクロナデにより調整され、底部は回転糸切りのままである。器体部に明瞭な棱は認められない。胎土は赤粒子が混じる赤褐色の土である。

1203は、推定口径15.2cm、器高2.4cmの土師器皿で、底部は欠損している。器体は内外面ともロクロナデによる調整で、体部に棱はみられない。胎土は赤粒子の混じる赤褐色の土である。

1204は、土師器の底部の断片で、底径は4.6cm。外面はロクロナデに下半部がヘラケズリ、内面はロクロナデによる調整である。底部は全面ヘラケズリされている。胎土は赤粒子、長石、石英粒子を含む赤褐色の土である。

12号住居跡はこれらの他、覆土より綠釉陶器、銅付黒釉陶器、信州系の搬入品と思われる土師器片が出土地しているが、遺構が良く残っていた割に遺物は少なかった。1201~1204の遺物から推測するとX~XI期、9世紀後半~10世紀中頃と思われる。

13号住居跡（第20・21図、図版10）

J12グリッドに位置する。3.9m×3.8mの方形の住居跡である。住居跡内からビットが幾つか検出されたが数cm～10数cmと浅く、深さも一定しない。北壁側に棚状に段がついていた。床面は部分的に残るのみである。

カマドは東壁の中央よりやや南寄りに位置する。石組は原形をとどめていないが、焼土掘り込みが検出された。

出土した遺物は、僅かに残る床面の高さから、床面出土遺物と覆土出土とに選別した。

1301は床面出土の甲型系黒色土器である。上半部は欠損しており、底径6.1cmの下半部のみの器片である。体部外面はロクロナデに斜めヘラケズリ、内面はロクロナデにより調整されている。内面には黑色処理が施されており、みこみ部には左溝巻状暗文がみられる。胎土は赤粒子を含む赤褐色の坯に用いられている上である。

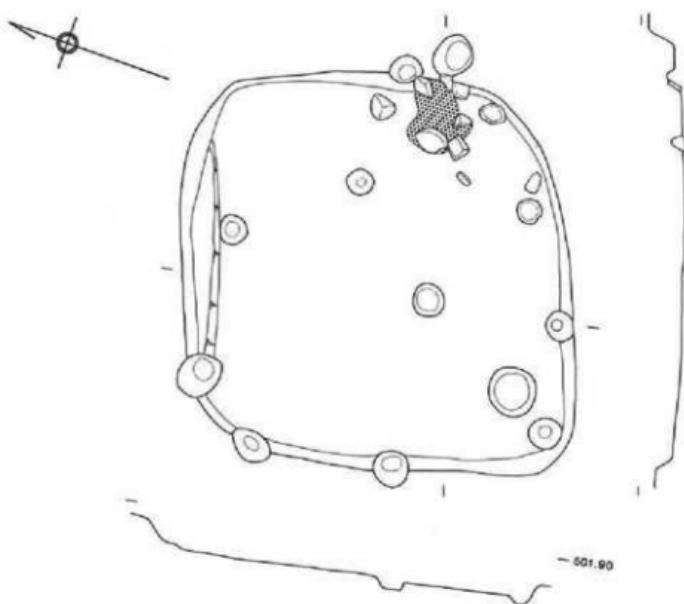
1302も床面出土の土師器環で、底部のみの出土である。底径は4.3cm。外面はロクロナデにヘラケズリ、内面はロクロナデによる調整、底部はヘラケズリされている。胎土は赤粒子の混じる明赤褐色の土である。

1303は床面出土の土師器皿で、口径13cm、器高2.4cm、器体は外外面ともロクロナデによる調整で、縁はみられない。底部はヘラケズリされている。胎土は赤粒子が混じる赤褐色の土である。

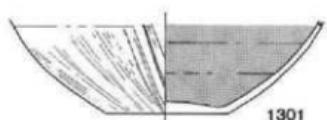
1304は、床面出土の土師器皿で推定口径32.6cm、厚口縁型で、外面は縱方向のハケメ、内面は横方向のハケメにより調整されている。胎土は金雲母が良く目立ち、長石、石英の粒子が混じる赤褐色の土である。

1305も床面出土で、推定口径15cmの小型の土師器皿である。口縁部はナデ、胴部は外表面が縱方向、内面が横方向のハケメで調整されている。胎土は金雲母が目立ち、長石、石英の粒子が混じる赤褐色の土である。

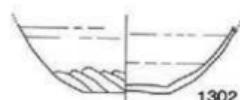
13号住居跡より出土した遺物のうち、1301、1302、1303は北壁の棚状の部分近くから、まとまって出土した。その様子から廃棄されたもののようにも思えるが、床面高とほぼ同じ高さであった。それでも1301、1302は完形に復せず、この住居跡に付随した遺物ではない可能性がある。こうしたことから、住居跡の時期についても推測し難いが、X～XI二期、9世紀後半～10世紀中頃と思われる。



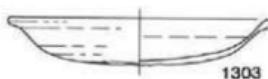
第20図 13号住居跡 (1/60)



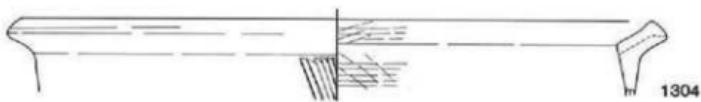
1301



1302



1303

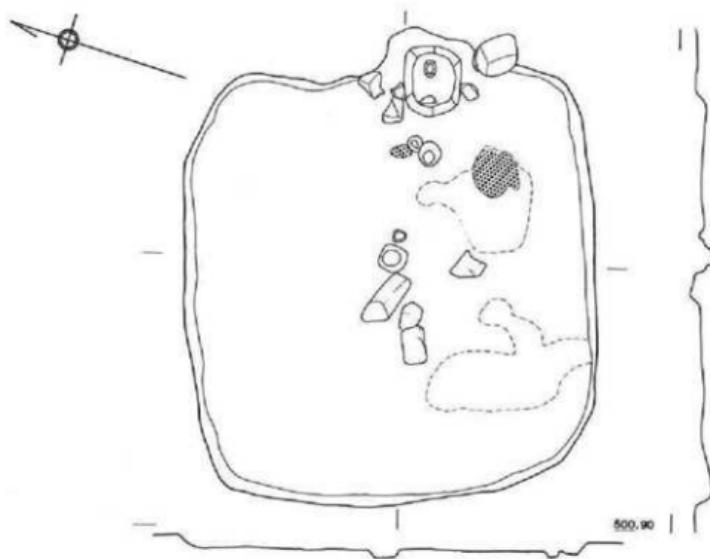


1304



1305

第21図 13号住居跡遺物 (1 / 3)



第22図 14号住居跡 (1/60)

14号住居跡 (第22・23図、図版11)

K13グリッドに位置する。4.2m×4mの方形の住居跡で、掘り込みが10cmほど残っていた。床面は一部に残存していたが、柱穴、周溝は検出されなかった。

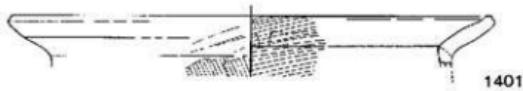
カマドは東壁、中央のやや南寄りに位置する。石組、掘り込み、焼土が検出されたが、石組の遺存状態は良くない。掘り込み内には、カマド支石を抜き去った跡のようなピットが検出された。

遺物は少なく、次の土器器表のみである。

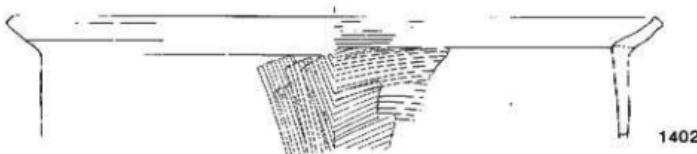
1401は、床面出土で推定口径24cm、胎土は長石、石英の粒子を含み、金雲母が非常に目立つ赤褐色である。薄口縁型で剖部は内外面とも、ハケメ調整されている。

1402はカマド出土で推定口径32.4cm、薄口縁型で剖部は内外面ともハケメ調整である。胎土は金雲母が目立ち、黒雲母、長石、石英粒子が混じる明褐色の土である。

14号住居は良好な資料に恵まれず、2つの表がⅧ期、9世紀前半頃に推定される他は、時期を知る手がかりはない。

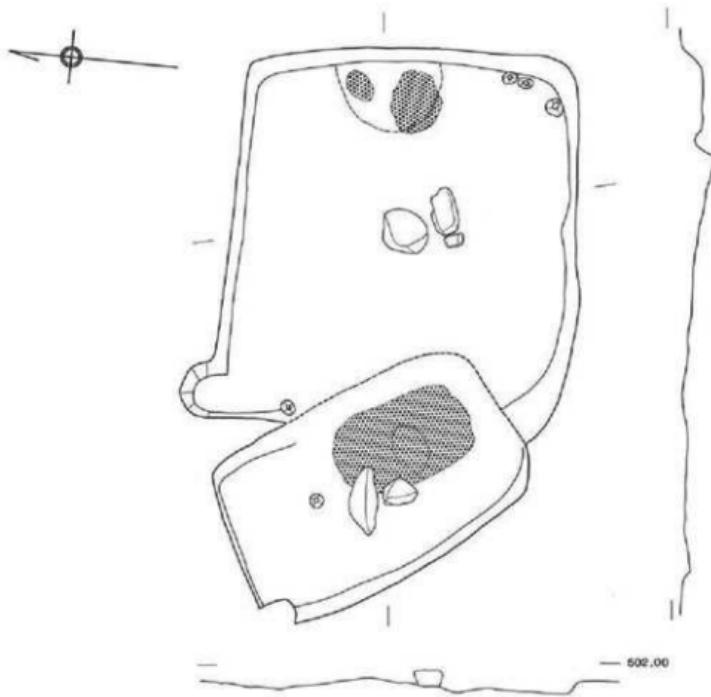


1401



1402

第23図 14号住居跡遺物 (1/3)



第24図 15号住居跡・矩形竪穴状造構 (1/60)

15号住居跡 (第24、25図、図版11、12)

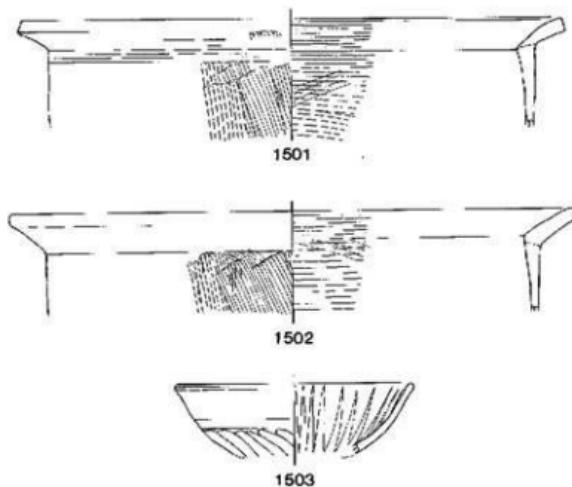
K12グリッドに位置する。3.7m×3.5mの方形の住居跡で床面は、残っていなかった。西壁は矩形の竪穴状造構により切られている。

カマドは石組が残っていなかったが、東壁のはば中央に焼土が検出された箇所がみられたことから、この位置にカマドがあったと思われる。掘り込みは確認されなかった。

遺物は焼土が最も多く散在する高さを床面と想定し、覆土出土と床面出土遺物とに分けて取り上げた。

1501は床面出土の土師器甕で、推定口径27cm、薄口縁型で、胴部は内外面ともハケメ調整、胎土は金雲母が目立ち長石粒子が混じる赤褐色の土である。

1502は、同じく床面出土の土師器甕で、推定口径28cm、薄口縁型で胴部は内外面とも、ハケメ調整。胎土は金雲母が僅かにみられ、長石・石英粒子が混じる赤褐色の土である。



第25図 15号住居跡遺物 (1/3)

1503は床面出土の上師器環で、口径11.8cm。底部は欠損している。外面はロクロナデとヘラケズリ、内面はロクロナデによる調整で、放射状暗文が施されている。胎土は赤粒子の混じる赤褐色の土である。

以上、僅かな遺物から推測すると、Ⅶ～Ⅹ期、9世紀前半～後半頃の住居跡と思われる。矩形竪穴状遺構については、後述する。

17号住居跡 (第26、27図、図版12、15)

Q13グリッドに位置する。3.7m×3~4.5mの台形の住居跡で、周構・柱穴・床面は検出されなかった。

カマドは東壁の中央よりやや南寄りに位置する。石組の残りは良く、カマド掘り込みには支石も残っていた。天井石の一部に縄文時代の石皿があったが、被熱の痕跡がなく、覆土と共に流れ込んだだけかも知れない。焼土は全く検出されなかった。

この住居跡も堅固な床面が検出されなかった。そのため、カマド掘り込みの確認面や石組を参考に床面高を想定して遺物を取り上げた。

1701はカマドのすぐ南側、床面高で出土した上師器環で、口径14.5cm、器高4.8cm、底径5.2cm。器面調整は外面がロクロナデとヘラケズリ、内面はロクロナデによる。底部はヘラケズリされている。内面には墨色処理が施され、みこみ部には左溝巻状暗文がみられる。胎土は赤粒

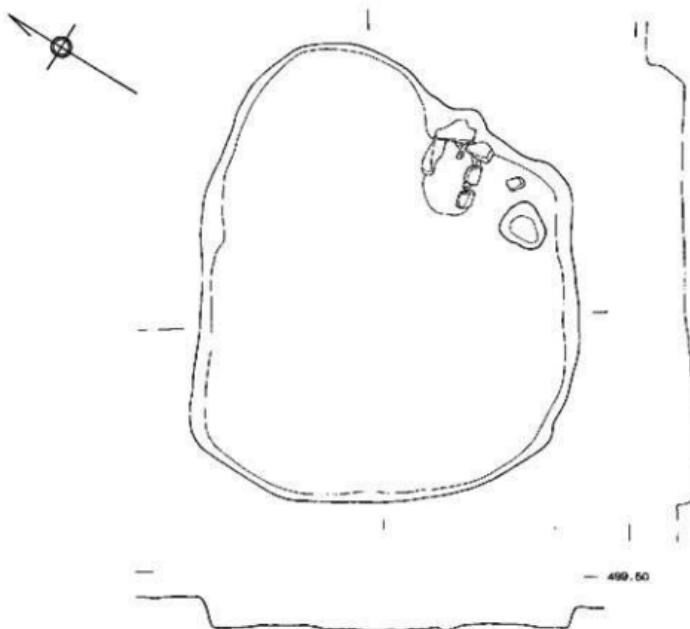
子の混じる赤褐色の土である。

1702は、北壁際の覆土中で出土した土師器皿で、口径12.4cm、器高2.1cm、底径4.6cm。外面はロクロナデに、下半部から底部にかけてヘラケズリ、内面はロクロナデ、底部はヘラケズリにより整形されている。体部に稜はみられず、底から口縁までなめらかに立ちあがる。胎土は赤粒子の混じる赤褐色の土である。底部には、10号住居遺物と同じく十字形の線刻がみられる。

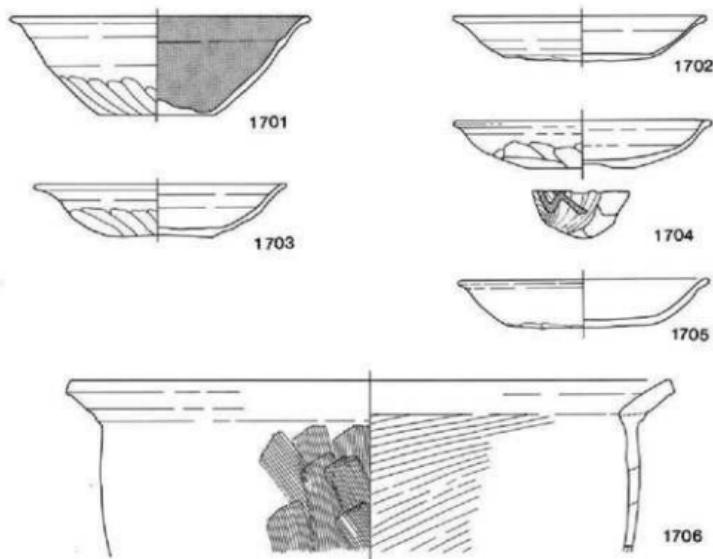
1703は、南壁際の床面高で出土した土師器皿で、口径12.8cm、器高2.7cm、底径5.1cm。外面はロクロナデにヘラケズリ、内面はロクロナデ、底部はヘラケズリにより整形される。体部に稜はみられない。胎土は赤粒子の混じる暗赤褐色の土である。

1704も、1703と並んで出土した土師器皿で、口径12.8cm、器高2.3cm、底径5cm。外面はロクロナデにヘラケズリ、内面はロクロナデ、底部は糸切り後ヘラケズリにより整形されている。体部に稜ではなく、なめらかな曲線を描いて立ち上がる。胎土は赤粒子の混じる赤褐色の土である。底部に「ト」(トカ)の墨書きがある。

1705はカマドより出土した土師器皿で、推定口径30cm、薄口縁型だがやや肥厚している感があ



第26図 17号住居跡 (1/60)



第27図 17号住居跡遺物 (1/3)

る。胴部は内外面ともハケメ調整である。胎土は赤褐色の土に金雲母・長石・石英の粒子が混じる。

17号住居跡はほぼ同型の土師器皿4点が出土している。1702は覆土出土であるが、いずれもX-XII期、9世紀後半~10世紀中頃のものであろう。他の遺物からもX-XII期に属する住居と考えて良いと思われる。1702が覆土出土であるため確実なことではないが、10号住居跡出土の十字形の線刻をもつ土器と、1702は同時期のものであるとすれば、10号住居と17号住居は時間的に近接して並存していた可能性があり、それ以上の関係が予想される。

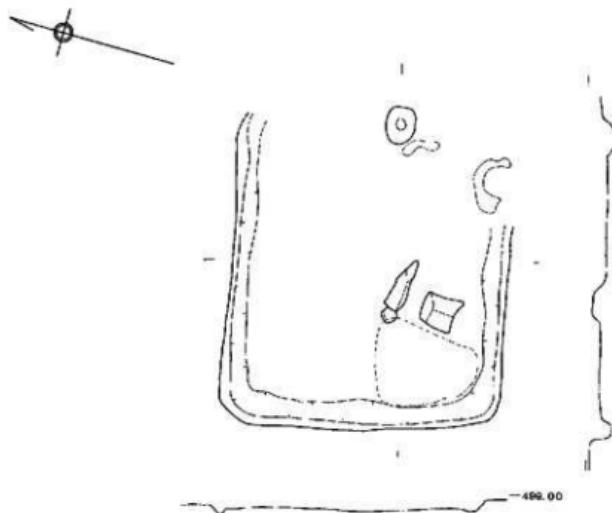
18号住居跡

R12グリッドで、北東壁の一部が確認された。遺物もカマドもなく、方形の住居跡であろうということしか分らない。一応、平安時代の造構として報告しておく。

19号住居跡 (第28図、図版14)

S11グリッドに位置する。2.9m×3.5mのやや小ぶりの方形の住居跡で、東壁を除き、深さ5cmほどの周溝が検出された。床面も一部で検出された。

カマド石組は、住居跡全体が削平されているため残っていない。焼土と掘り込みから、東壁の



第28図 19号住居跡 (1/60)

中央より南寄りに位置していたことが分る。

遺物は覆土より小器片が出土したのみで、報告すべきものは無い。従って住居跡の時期も全く不明である。

20号住居跡 (第29・30図、図版13、15)

T12グリッドに位置する。3m×3mの方形の住居跡で、床面は半分以上にわたって良好に残っていた。周溝も全周に検出されたが柱穴は検出されなかった。

カマドは、平安時代の住居跡中で唯一、北壁側、中央よりやや東寄りに位置する。石組も比較的、残りが良い方で焼土と掘り込みも検出された。支石も残されていた。

2001は床面出土の土師器环で、推定口径12.7cm、器高4.4cm、底径5cm。器面は外面がロクロナデ、内面はロクロナデに幅広のミガキ暗文が見られる。内面は黒色処理されている。底部は糸切りのまま残されている。胎土は雲母、長石粒子、赤粒子が混じる薄黄橙色の土だが、甲斐型环の胎土とは異質のものである。

2002は、西壁際、床面より出土した土師器环で、口径11.9cm、器高3.9cm、底径4.1cm。胎土は赤粒子の混じる赤褐色の土である。器面調整は、外面がロクロナデにヘラケズリ、内面はロクロナデに放射状暗文が施され、底部はヘラケズリされている。みこみ部には溝巻状の凹凸がみられる。

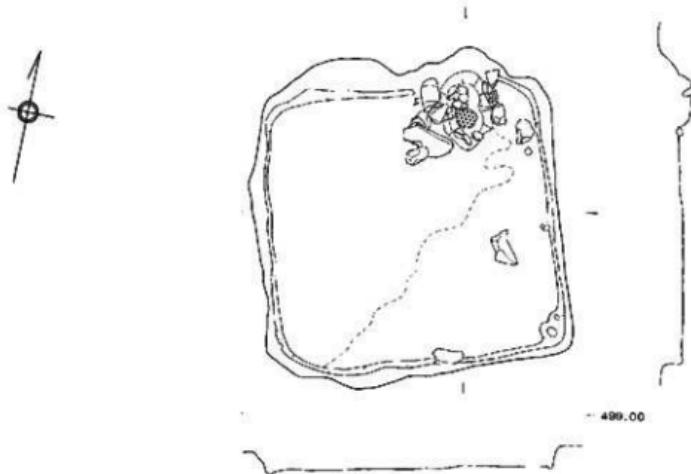
2003はカマド出土の土師器環で、内外面とも黒色処理されている。口径13cm、器高4.9cm、底径5.6cm。外面の調整はロクロナデで、内面には口縁からみこみ部中央まで放射状暗文が描かれている。底部は糸切りのままである。胎土は長石・石英粒子・赤粒子が混じる薄黄橙色で、2001の胎土質と共通する。

2004は覆土出上であるが、報告しておく。口径14.3cm、器高5.2cm、底径5.3cmで、胎土は赤粒子が混じる黄褐色の土である。器面調整は外面がロクロナデに回転ヘラケズリ、内面はロクロナデに放射状暗文があり、みこみ部にも渦巻状の暗文がみられる。底部はヘラケズリされている。内面は黒色処理され、甲斐型系黒色土器と思われる。

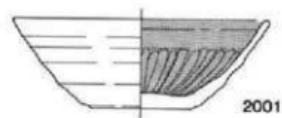
2005はカマド出土の土師器甕で推定口径28.5cm。胎土は長石・石英粒子・金雲母の混じる赤褐色の土で、薄口縁型、内外面ともハケメによる調整である。

2006も同じくカマド出土の土師器甕で、推定口径30cm。金雲母・長石・石英粒子の混じる赤褐色の胎土で、厚口縁型の口縁部をもつ。内外面ともハケメによる調整が施される。胴部中央には接合部があるが、屈曲はさほど強くない。

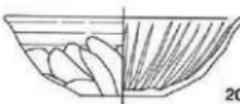
20号住居跡は2001、2002の甲斐型土師器とは生産地が異なると思われる甕が出土している他、カマド位置も北寄りで、特異な存在である。時期は2002、2005などからX-XⅡ期、9世紀後半～10世紀中頃になると推測される。



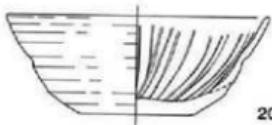
第29図 20号住居跡 (1/60)



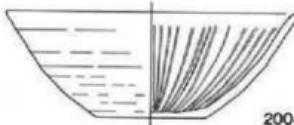
2001



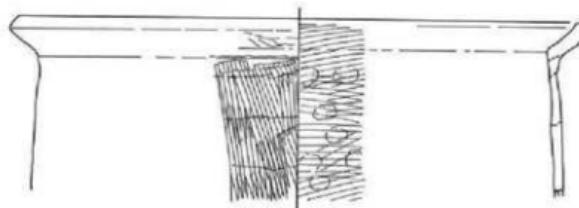
2002



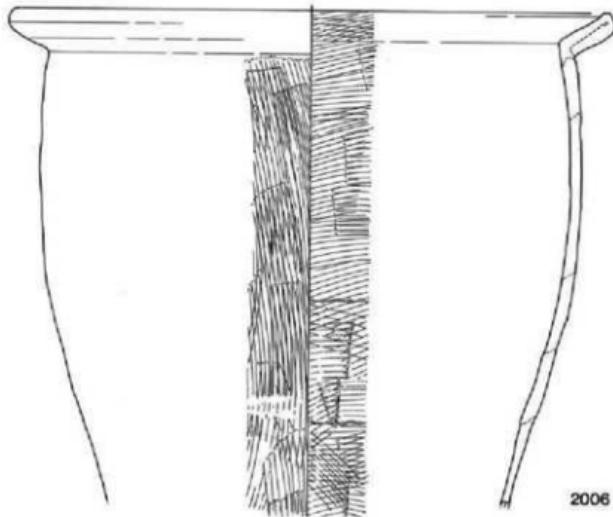
2003



2004

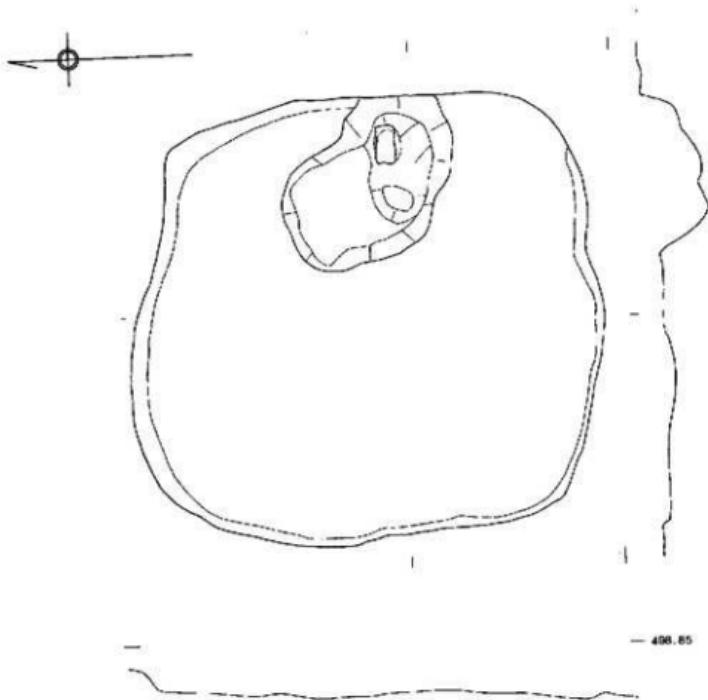


2005



2006

第30図 20号住居跡遺物 (1/3)



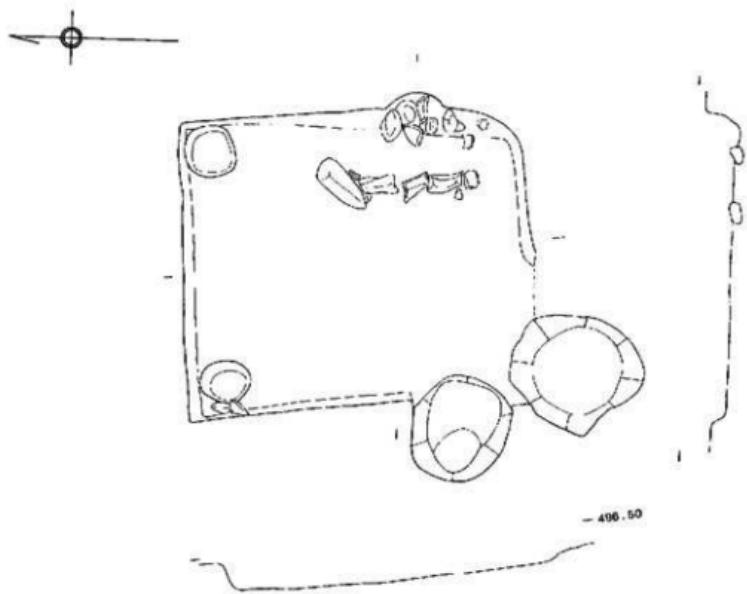
第31図 21号住居跡

21号住居跡（第31図、図版14）

S12グリッドに位置する。4.6m×4.4mの方形の住居跡であるが、削平され残りが悪い。床面も残らず、柱穴・周溝・カマドも確認できなかった。東壁沿いに土坑が検出されたが、切り合は確認できなかった。

カマドは石組も掘り込みもなく、東壁中央よりやや内寄りに焼上粒子が散見されたに過ぎない。或いは土坑により破壊されたのかも知れない。

遺物も小器片が僅かに出土したのみで特に報告すべきものは無かった。



第32図 22号住居跡 (1/60)

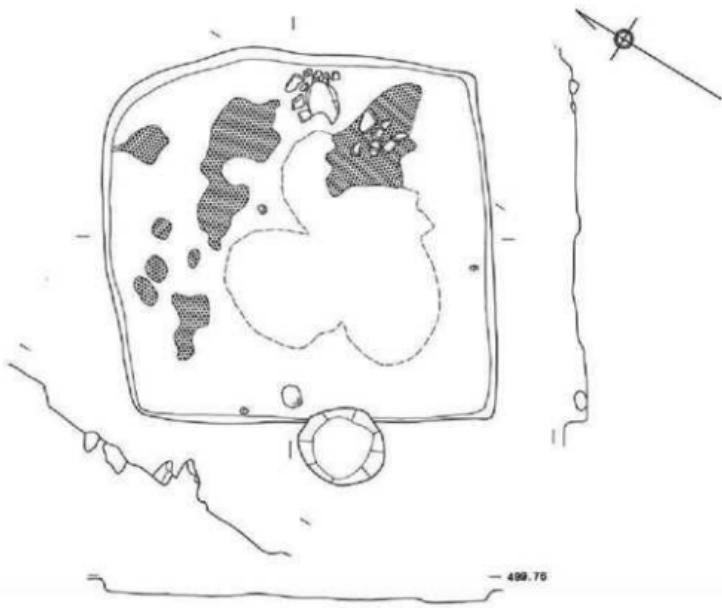
22号住居跡 (第32図、岡版15)

R14グリッドに位置する。2.9m×3.4mの方形の住居跡で南壁は土坑に接しており、境界は確認できなかった。床面・周溝は検出されず、ピットが検出されたのみである。

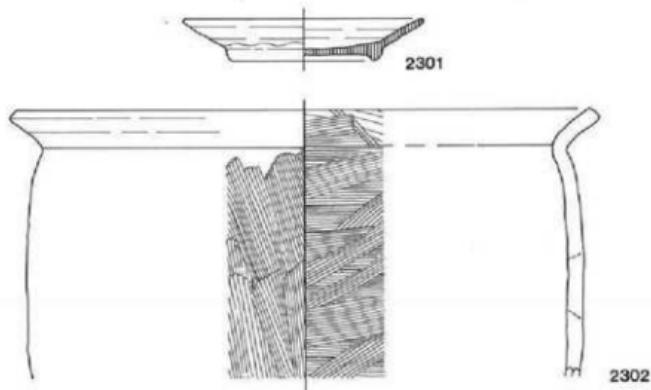
カマドは東壁の中央より南寄りに位置する。石組も残存するが、掘り込み、焼土は検出されなかつた。

遺物は特に報告すべきものではなく、覆土から小器片が出上したのみである。カマド傍からは甲変型壺と同質の胎土を使った、小型鉢の底部が出土している。底部はヘラケズリ、器体外面は回転ヘラケズリされ、ロクロナデ痕もみられる。他に甲変型とは異なる黒色土器(壺)、壺の断片などが出土している。

以上のことから時期は平安時代ということしか分からない。



第33図 23号住居跡 (1/60)



第34図 23号住居跡遺物 (1/3)

23号住居跡（第33、34図、図版16）

O13グリッドに位置する。3.9m×4.2mの方形の住居跡で、中央に床面が検出された。住居跡全体に焼土がみられたが、炭化物は多くなかった。

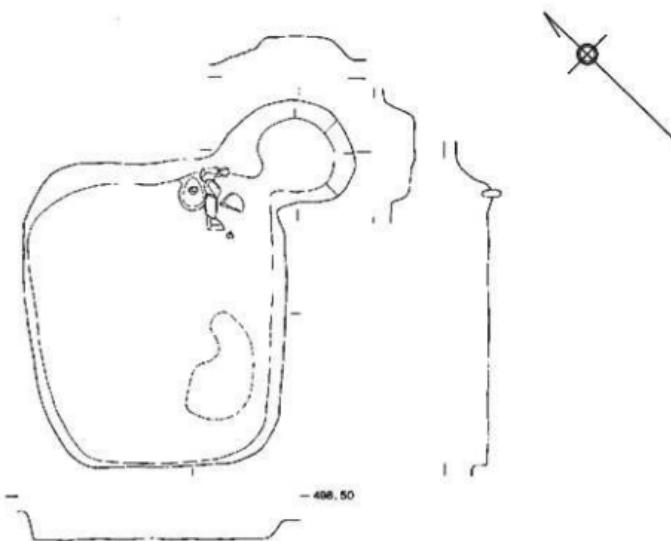
カマドは東壁、中央より南寄りに石趙が確認された。掘り込みは検出されなかった。

遺物も僅かで特に報告すべきものは次の2点のみである。

2301は口径12cm、器高2.1cm、底径7cmの灰釉陶器の皿で、釉調は灰白色、器体部上半につけかけしてある。胎土は灰白色で緻密な粘土である。カマドより出土した。

2302は、同じくカマド出土の土師器甕で、推定口径29.2cm、胎土は金雲母、長石、石英の粒子が混じる赤褐色の土である。薄口縁型で内外面ともハケメで調整されている。

23号住居は出土遺物が少なく時期は不明だが、VI～VII期 8世紀後半～9世紀初頭頃と思われる。



第35図 24号住居跡 (1/60)

24号住居跡（第35・36図、図版17）

R14グリッドに位置する。3m×2.6mの小型の方形住居跡で床面が一部に残っていた。柱穴、周溝は検出されなかった。東南隅には土坑があるが、住居との切り合い関係は覆土が黒色土であったため確認できなかった。

東壁の中央より南寄りに、被熱して赤変した石組と若干の焼土が検出された。カマド掘り込みと支石も残されている。

遺物には恵まれず、土師器壺一個が復原されたのみである。覆土から出土したのでこの住居跡に直接関係するか疑問であるが、墨書のある土器片が4片発見されている。

2401は覆土出土の土師器壺で、口径12.8cm、底部は欠損している。器体は内外面とも、ロクロナデにより整形され、内面は黒色処理されている。胎土は長石粒子が混じる砂質の黄褐色土で、甲斐型壺の胎土とは異なる。

2402~2404は、いずれも覆土から出土したもので、土師器壺の底部、下体部、口辺部である。

2402は則天文字で「丸」(大)、2403は「直」(直)と書かれている。

24号住居は良好な遺物に乏しく、時期は明確ではないが出土した遺物のうち、壺片は、玉縁状の口縁部が多く、内面に暗文をもつものが少ないとからX-XII期、9世紀後半~10世紀中頃の可能性がある。



第36図 24号住居跡遺物 (1/3)

27号住居跡 (第37、38図、図版18)

G10グリッドに位置する。2/3は造田により削られてしまっている。床面、周溝、柱穴は確認されなかった。

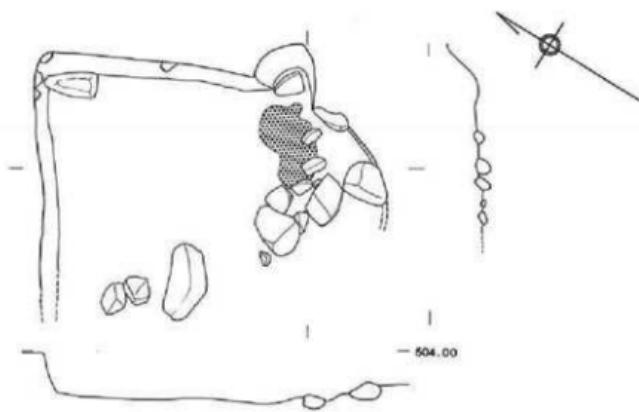
カマドは東壁の中央よりやや南寄りに焼土と石組らしきものが認められたのみである。

報告すべき遺物は次の2点のみである。

2701は覆土より出土した土師器皿で、口径13.8cm、器高2.7cm、底径5.2cmで、器体部外面はロクロナデ、下半部は回転ヘラケズリ、内面はロクロナデで調整されている。内面みこみ部から体部にかけて渦巻状暗文がみられる。底部はヘラケズリされている。

2702は、覆土より出土した土師器壺の口縁部片で、墨書「千ヶ」がみられる。

時期を決める遺物が全くないため、27号住居跡に年代を与えることはできない。2701はIX~X期、9世紀中~後半頃と思われる所以、平安時代中頃としておきたい。



第37図 27号住居跡 (1/60)

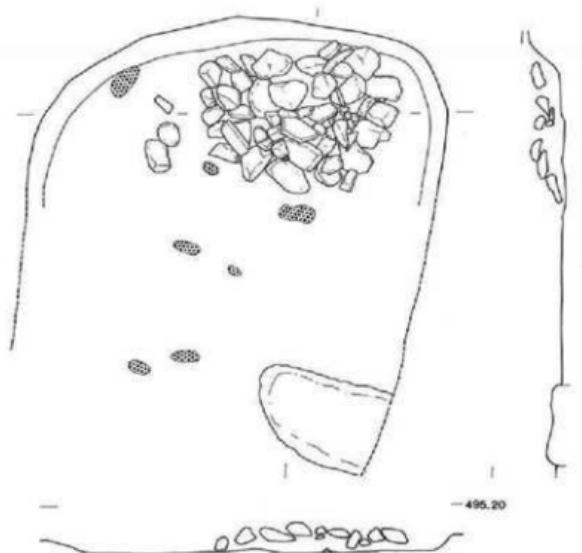


2702



2701

第38図 27号住居跡遺物 (1/2)



第39図 28号住居跡 (1/60)

28号住居跡（第39、40図、図版19）

T16-U16グリッドに位置する。西側半分は烟により削平されている。周溝、柱穴、床面は検出されなかった。住居跡全体に炭化物と焼土が散在していたが、焼失家屋と判断するほど多量ではなかった。

カマドは東壁の中央よりやや南寄りにあったと思われる。カマドと思われる場所からは、30個ほどの礫がカマドを覆う形で出土した。なかには被熱して赤変した石も混じっていた。また、この礫中、礫上から灰釉陶器が出土した。本来のカマド石組と思われる石は、この集石の下にあり、床面と思しき面と集石との間には10~15cmほど覆土と同じ土が入り込んでいた。

遺物は、カマド焼土から床面高を想定して取り上げた。

2801は住居跡中央の床面高より出土した灰釉陶器の碗で、口径16.4cm、器高6.4cm、底径8cm。胎土は灰白色で緻密な粘土である。釉は灰白色で、ハケ塗りしてある。器体は内外面ともロクロナデ整形で、高台は削り出しである。

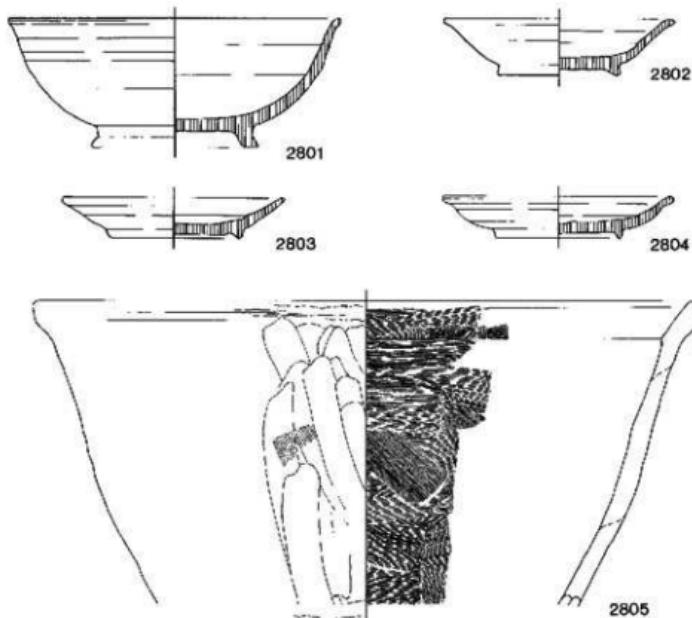
2802は、カマド傍の床面高から出土した灰釉陶器皿で、口径11.4cm、器高2.8cm、底径5.7cm。胎土は灰白色の緻密な粘土である。釉は灰白色でハケ塗り。器体は内外面ともロクロナデによる整形で、内面みこみ部には満巻状暗文がみられる。底部から体部下半にかけて墨で汚れており、底部は、いくらか磨耗しているため転用碗と思われる。

2803は、住居跡中央の床面高で出土した灰釉陶器皿で、転用碗と思われる。口径11cm、器高2cm、底径6.4cmで、胎土は灰白色で緻密な粘土を使用している。釉は灰白色でハケ塗りしている。整形は内外面ともロクロナデ、底部には糸切り痕があり、高台は貼付けてある。みこみ部はつるつるに磨耗しており、内外面とも墨で汚れている。

2804は、カマド集石上より出土した灰釉陶器皿で、口径11.4cm、器高2.1cm、底径6.1cm。胎土は長石粒の混じる淡灰色の緻密な粘土で、釉は灰白色に線がかった斑がみられハケ塗りである。内外面ともロクロナデで、底部は回転ヘラケズリ、高台は削り出している。前2者と異なり墨痕はない。

2805は東壁とカマド集石の間から出土した上師器鉢で、推定口径33cm。胎土は長石、石英粒子が混じる赤褐色の土で、金雲母は僅かに認められる程度である。外面は磨耗しているため、ハケメによる整形か、ヘラケズリしているのか判別できない。内面は横方向のハケメ調整である。

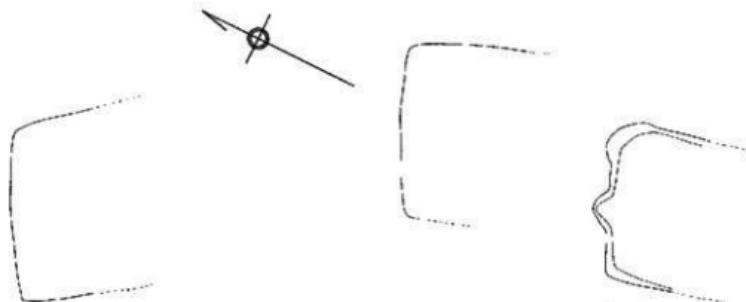
28号住居跡は灰釉陶器の年代がそのまま、住居跡の時期と考えられる。カマドに集石をする類例は村内では、神取遺跡（'92年調査）に一軒ある。住居廃棄時の祭祠行為と解釈すべきなのか、類例を検討したうえで考えてみたい。



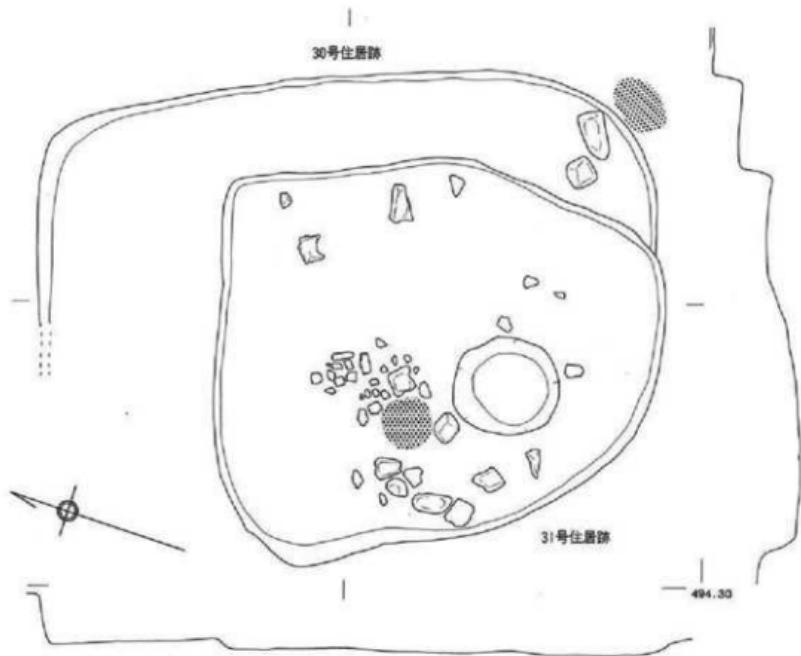
第40図 28号住居跡遺物 (1/3)

29、32、33号住居跡 (第41図)

29、32、33号住居跡は、輪部だけがかろうじて確認されただけだが、方形であることから一応、平安時代の遺構として報告しておく。遺物は無かった。



第41図 29・32・33号住居跡 (1/120)

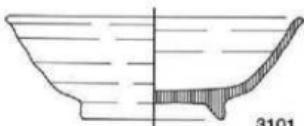


第42図 30・31号住居跡 (1/60)

31号住居跡 (第42、43図)

31号住居跡は、Q20グリッドで検出されたが、削平され残りが悪かった。カマド位置は不明、柱穴・周溝・床面も検出されなかった。灰釉陶器楕が1個出土しているため、住居跡として報告しておく。

3101は東壁沿いで出土した。床面は推測できなかつたため、覆土出土かどうかも不明である。口径14.7cm、器高5.1cm、底径6.9cm。胎土は灰白色で緻密だが、ややざらついた粘土である。釉は淡灰色に淡緑の斑が混じり、ハケ塗りである。器体外面には施釉されない。高台は削り出しで、底部はヘラケズリされている。器体外面ともロクロナナ整形である。



第43図 31号住居跡遺物 (1/3)

2 その他の遺構と出土遺物

焼土（折込図版）

1号焼土

3号配石束側、17グリッド、第4層の暗褐色土層で検出された。焼土量は僅かで周囲に遺物はなかった。

2号焼土

C7グリッドの黒色土層中で検出された。焼土量は多く、最も厚いところでは3cmほどもある。焼土近くに遺物はないが、同じC7グリッドから上師器環が出土しており（第45図、図版21）、平安時代の住居跡が削平され、カマド焼上が残ったものと推測される。

3号焼土

E7グリッド、7号住居跡の北東隅近くで検出された。焼土量は多くないが、1m程の範囲にみられた。7号住居跡覆土上にも認められたため、住居廃棄後のものと思われる。周囲に遺物は出土しなかった。

4号～7号焼土

J11～J12グリッドにかけて、第3層の黒色土層で検出された。周囲に遺物はなかった。いずれの焼土も最大幅が20～30cm、厚さは3～5cmほどである。

10号焼土

J12グリッドの第3層、黒色土層で検出された。焼土量は少なく、遺物も周囲にはなかった。

11号焼土

27号住居跡の覆土上で検出された。焼土量は僅かで、遺物も出土しなかった。

12号焼土

M12グリッド、第3層で検出された。焼土量は多く、80cmほどの広がりをもつ。焼上は最大で10cmほどの厚さである。焼土中より灰釉陶器皿片が出土した。

13号焼土

I8グリッド、第4層暗褐色土層で検出された。焼土量は多く、厚い。焼土中より、土師器窯の底部が出土している。

12号、13号焼土は、平安時代の住居跡が削平され、カマド焼上のみが残ったものと考えられる。

矩形竪穴状遺構（第24図、図版11）

K12グリッド、15号住居跡の西壁を切る形で位置する。長軸3m×短軸2mの矩形の竪穴状の遺構で、焼土が南寄りで検出された。遺物は全く出土せず、床面らしき固くしまった面、柱穴、周溝は検出されなかった。



第44図 方形竪穴状遺構（1／60）

方形竪穴状遺構（第44図、図版20）

K12グリッドに位置する。長軸2.6m×短軸2mのはば方形の竪穴状の遺構で、焼土が検出された。しかし、矩形竪穴状遺構と同じく、周溝・柱穴・床面は検出されず、遺物も覆土から縄文時代の小器片が数点出土したのみである。

遺構の特徴は矩形竪穴状遺構と類似しており、同時期に、同じ機能を有した施設と推測されるが、他の住居跡と比較して小型であり、焼土位置などの特徴が異なることから、住居ではないと思われる。

土坑（折込全体図）

土坑及びビットは數多く検出されたが、平安時代の掘立柱建物などを想定し得る箇所はなく、また明らかに平安時代と判定できる土坑もなかった。しかし、J12グリッド周辺には、深さ、大きさが揃ったビット群があり、調査時には確認できなかったものの、掘立柱建物が存在した可能性もある。

また後述するように、縄文時代のものと思われる土坑が幾つかあったが、それらについては、遺物を整理し改めて報告するつもりである。

3 遺構外出土遺物 (第45図、図版21)

C 7 グリッドからは次の3点の土師器环が出土した。

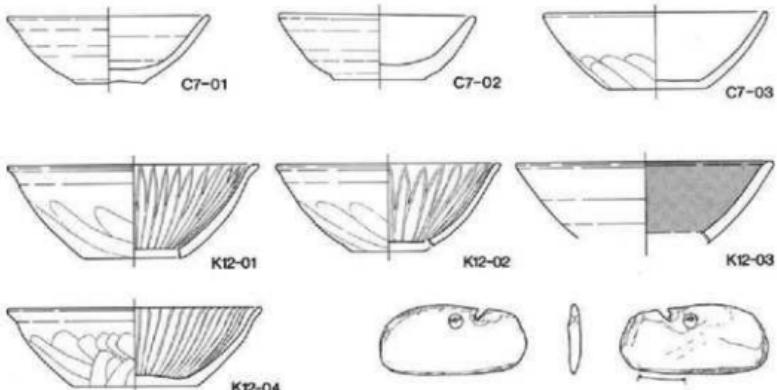
C 7-01は、口径10.8cm、器高3.6cm、底径3.8cm。胎土は赤粒子を含む黄橙色で、甲斐型環と同質である。磨耗しているため、整形は確実には分らないが、内外面ともロクロナデでヘラケズリはしていない。底部は糸切りのままと思われる。内面の暗文も磨滅してあるかどうか不明である。

C 7-02は、口径10.9cm、器高3.6cm、底径4.9cm。胎土は黒雲母、長石粒子が混じる暗赤褐色の、砂っぽいざらついた土で、甲斐型環の胎土質とは異なる。器体内外面ともロクロナデのみの整形で、底部は静止糸切りである。

C 7-03は、口径11.9cm、器高4.1cm、底径5.2cm。胎土は、赤粒子が混じる赤褐色の土である。器体外面はロクロナデに下半部が斜めヘラケズリ、内面はロクロナデにより整形される。底部はヘラケズリされている。

K12-01は、K12グリッドより出土した土師器环で口径13.3cm、器高5cm、底径5.3cm。胎土は赤粒子を僅かに含む黄橙色で甲斐型環と同質である。器体外面はロクロナデに斜めヘラケズリ、内面はロクロナデで調整され、放射状暗文がみられる。僅かに残る底部はヘラケズリされていると思われる。

同じくK12グリッド出土のK12-02は、口径12cm、器高4.7cm、底径3.9cm。胎土は赤粒子、長石粒子が混じる赤褐色で甲斐型環と同質である。器体外面はロクロナデに斜めヘラケズリ、内面



第45図 遺構外出土遺物 (1/3)

はロクロナデで調整され、放射状暗文がみられる。底部は欠損している。

K12-03は、口径13.7cm。妙っぽい、ざらついた胎土で、赤粒子が混じり、黄橙色である。甲斐型坏の胎土質とは異なる。器体内外面はロクロナデのみで整形され、内面は黒色処理されている。

K12-04は、口径13.6cm、器高4.2cm、底径6.7cmの土師器坏で、15号住居の真上で出土している。15号住居確認前の黒色土層中で発見された。胎上は、長石粒子が目立ち、赤粒子、雲母が僅かに混じる赤褐色の、ややざらついた土である。器体外面はロクロナデに斜めヘラケズリ、内面はロクロナデにより調整され、暗文がみられる。底部は全面がヘラケズリされている。口径、底径とも大きいが、X期の特徴が描っているため、X期頃と思われる。

K12グリッドには15号住居があり、これらK12出土の3点は、或いは15号住居ないしはJ12グリッドの焼土群と関連するのかも知れない。K12-01、K12-02、K12-03は、IX-X期頃のものと推測される。

石包丁（第45図、図版20）

15号住居東北側の第3層黒色土層で、磨製の石包丁が出土した。刃部は、横方向に擦痕がみられ、矢印部分は光沢がでている。石質は粘板岩製である。口幅、2穴であったものの片側の穴が欠損したように見える。県内では石包丁自体の出土が少なく、遺跡内で弥生時代の遺物が全く発見されていないため、時期については明言し難いが、弥生時代後期から古墳時代初頭と思われる。東日本には磨製石包丁が極端に少ないだけに興味ある資料となろう。

第4章 繩文時代の遺構と遺物（図版22～48）

星敷添遺跡からは、縄文時代早期末～後期中葉までの遺構・遺物が出土している。これらは現在、整理途上であり、詳細な報告はここでは適わないが、写真により主な遺構を紹介しておきたい。各遺構の時期は可能な限り、特定しておくが、整理途上のことなので、今後、変更する可能性があることを了解して戴きたい。

1 配石遺構

1号配石（図版22）

F 6グリッド東西2m×南北7mの不定形で、石皿片2個、ハチノス石3個、凹石1個、土器片が配石中より出土した。配石に用いた石は、人頭大程のものが多く、大きな碟は元来、地表に露出していたものをそのまま配石に取り入れている。僅かに出土した上器片は中期末～後期初頭のもので、配石の石を全て取り除いた下から出土した。特定の時期のものが多いということもなく、時期決定は難しい。土坑は検出されなかった。

2号配石（図版23）

G 8グリッドで検出。人頭人の右で円をつくり、その真中に石棒を立てた配石が3基ある。そのうち2基については石棒が残っていた。残りの1期の石棒と思しきものが、僅か3m離れた石垣の根石に使われていた。配石を据えた面高では、遺物や獸骨等は殆んど検出されなかった。遺物は少ないが、敢えて時期を特定すると、後期初頭、塙之内式段階と思われる。土坑は検出されなかった。

3号配石（図版24）

J 7～J 9グリッドに位置する石列状遺構だが、特定の構造は窺われない。やや、西にふくらむ弧状に石が連なる。石列中にはハチノス石が多く、何かしら人為的に造られた遺構には間違いないと思われる。配石覆土、配石を据えた面から多くの上器が出土しており、後期初頭（塙之内式）のものが最も多い。配石西側に水田の石垣があり、配石は一部破壊されていると思われる。配石の下30cm程からは、敷石のある遺構が出土している。3号配石の東側には、中期末～後期初頭と思われる上坑群があり、これら土坑群との関係もいすれ検討したい。土坑は検出されなかった。

4号配石(図版25)

H7グリッド。本来は、直径10m前後の同心円状に2列の石が並んでいたのかも知れない。或いは礫を巡らせた住居跡の可能性もある。石皿片や石棒片が出土している。配石の北側、つまり同心円が延びていたと思われる範囲には、石を巡らせた径30cm程の土坑、擦り石、凹石、江口上器片等が多く出土している。配石中からは時期決定の手がかりになるような遺物は出土していないが、これらのことから後期初頭の配石と推測される。

6号配石(図版26)

E8グリッド周辺。長さ6m程の不定形の配石で、拳大から、一抱え以上の大きな石までが用いられている。配石中には、石皿片、石棒、丸石、黒曜石原石、スタンプ型土製品、ハチノス石などが含まれていた。土器も大量に出土したが、完形に復せるものは無い。配石北側は11号住居(図版37)に統いている。現表土から僅か20cm程下にあり、配石が完全な状態のまま残されているのか疑問ではあるが、概ね、残っていると思われる。土器片は後期初頭～中葉のものが最も多く、特に加曾利B式の土器片が多いことから、後期中葉の配石と思われる。配石下で土坑を確認することはできなかったが、下25cm程から10号配石(図版29)が発見された。両者の関係が予想される。

8号配石(図版27)

E5グリッド。3本の指が延びた手のように見える不定形の配石であるが、写真下側は石垣及び暗渠により搅乱されている。配石中より、凹石、石劍などが出土したため、配石と認定したが、半分以上が搅乱を受けた様子であるため、断定できない。遺物も少なく時期決定も難しい。配石下からは土坑が一基確認されたが、遺物はなかった。

9号配石(図版28)

L13グリッド周辺。3号配石と同じ石列状の遺構で、石皿片、ハチノス石、磨石等が数多く見られた。人頭大の石が石列というより、石垣状、石壁状に積み上げられていたようである。石列の最も下の部分は、丁度、水田の石垣のように、一抱え程の石が根石のように並べられており、果して縄文時代の配石なのか、それ以降の構築物なのか、判定しきれない。土器片も出土したがいずれも小器片である。しかし、配石下層の根石状の石列から出土した石皿(図版48)、或いは東側にある11～17号配石と配石を構えた面が同じ高さであるといった事から、配石と認定した。時期は、直接、特定し得ないが、11～17号配石との比較及び9号配石と15号配石の中間から出土した土器(図版47)から、縄文時代後期初頭(掘之内式)と推測される。配石下から土坑等は検出されなかった。後述するように、11～17号配石を構える際の造成と関連する遺構であるかも知れない。

10号配石(図版29)

D9グリッド。6号配石の下25cm程から出土した。石棒、凹石、石皿片、ハチノス石等が含まれている。2号配石と同じく円に並べた石の真中に石棒を据えてあるように見える。配石下で上坑を確認することはできなかった。上器片は僅かしか出土しなかったが、後期初頭と思われる。加曾利B式期の6号配石との関係が、予想される。

11号配石(図版29)

J13グリッドに位置する。人頭大もしくは、ひと回り大きい石を数個並べただけの遺構で、下から深さ30cm程の土坑が検出された。配石覆土から土器片が出土しているが、直接、配石に関連すると思われる遺物は無かった。石の一部は熱による赤変が認められる。後出する14号配石と配石を据えた面が同じであることから後期初頭(堀之内式)以降のものと思われる。

12号配石(図版30)

K13グリッドに位置する。11号配石と同じ大きさの石を据えてあるが、まとまりはない。土坑も検出されなかった。

13号配石(図版30)

K13グリッド。人頭大の石を十数個並べた配石で、石の上面は平らになるよう揃えてある。後出する11号住居の炉部の敷石と似ているが、焼土等、炉を思わせるものは検出されなかった。赤変した石も一個だけである。土坑は検出されず、遺構に直接関連する遺物もなかった。これも、11号配石と同じ根拠から、後期初頭以降の遺構と推測される。

14号配石(図版31)

K13グリッドに位置する。径30cm程の石を円状に並べた遺構でハチノス石、丸石、凹石が含まれている。遺構に直接関連する遺物は無かったが、遺構下20~35cmで、堀之内II式土器を軸とする器にもつ敷石住居が発見されたため、14号配石も、同時期かそれ以後になると思われる。敷石住居と同じ範囲に石を配してあることから、14号配石は、明らかに敷石住居を意識して造られたのであろうが、敷石住居を故意に埋めて配石を据えたのか、既に埋没した敷石住居の上に据えたのかは不明である。土砂堆積量はさして多くない場所であるため、造成している可能性もある。調査中には、14号配石を据えた面から敷石住居の検出面まで、黒褐色の土が堆積していたため、造成を窺わせる様子は確認できなかったが、9号配石を土止めの石垣として、造成したとも考えられる。

環 環 遺 構 (図版32)

K13グリッド。拳大の石を環状に並べた遺構で、残存した部分から推測すると、直径5~6mの環状或いは隅丸方形状になっていたと思われる。12号配石、13号配石からは10cm程低いレベルで検出され、14号配石、その下の敷石住居に切られているように思えることから、いずれも、殆んど時期差がない遺構であると思われる。環の内側には、住居を思わせる遺物焼土等は出土しなかった。環状にめぐらせた石の中には、注口土器片や、凹石、黒曜石原石、打製石斧片が出土した。

16、17号配石 (図版33)

L12グリッド。まとまりの無い石が散在した遺構であるが、かづ状の石組、ハチノス石、石棒片、石錐、凹石、注口上器片、磨製石斧片等が出土したため、配石と判断した。かづ状の石組周辺が16号配石、その右側の大きな謎が並んだ箇所が17号配石である。17号配石中の最も大きな石は、全面に孔がうがってあるハチノス石である。こうした巨大なハチノス石は6号配石にもあり、その意味が問われよう。16、17号配石、11~14号配石と同一面で検出されており、後期初頭以降の遺構と思われる。

19号配石 (図版34)

R19グリッド。明らかにかづ状であるが、住居として確認できなかったため、配石としておいた。かづは一辺90cm~1mである。炉内より土器（加曾利E4式）が出上しており、中期末の遺構であることが分る。周囲では、住居掘り込み、柱穴、固くしまった床面等は確認できなかったが、恐らく住居であったろうと思われる。

20号配石 (図版34)

R19グリッド。5m程の長さに石が並んでいる遺構で、凹石、ハチノス石、石錐などが出土している。不定形ではあるが、配石としておく。出土した上器片が多い。

2 住居跡

1号敷石住居 (図版35)

G4グリッドに位置する。敷石の残存は良くないが、本体部と柄部とが分る。本来は、柄錐型の敷石住居なのか、柄部から住居中央にかけてだけ敷石をもつもののかは分らない。住居自体のプランは検出できなかった。炉からは、後期初頭（爐之内式？）と思われる粗製土器が出土しており、後期初頭の住居跡であると思われる。柱穴も検出されたが、黒色土中であるため、確実

に柱穴かどうか、断言できない。木体部と柄部の中間に土坑が検出されたが遺物は無かった。

2号敷石住居（図版36）

K13グリッド。14号配石下20cm程から検出された。長軸が2m程の菱形の敷石部である。住居がこれだけで完結していたのか張り出し部をもっていたのかは不明である。炉体上器は後期初頭（塙之内式）であることから、この時期の住居である。炉内に焼土は殆んど見られず、炉体土器も火熱でもろくなっているということはない。

3号敷石住居（図版37）

R19グリッド。一部は造田の際に破壊されたようである。長軸が2m足らずの小さな敷石部で、炉内には焼土も遺物も検出されなかった。大きさ、形状が、2号敷石住居に似ているが、2号敷石住居が、真平らな安山岩（鉄平石）を使用して、見事な敷石をもつてのに対し、3号敷石住居は、打ち欠いて、ほぼ平らに仕上げただけの石を敷いている、やや見劣りのする造りである。遺物が少なく時期は決められないが、2号敷石住居との類似から、後期初頭と推測される。

11号住居（図版37）

E8グリッド。6号配石に隣接する、方形に石を這らせ、炉部から張り出し部にかけて敷石をもった住居である。住居掘り込みは浅いが検出され、方形にめぐらせた石より一回り大きい台形である。炉内からは僅かな焼土と土器が出上し、後期初頭から中葉にかけての住居跡であることが推測される。塙敷添遺跡から1km程の地点にある清水端遺跡で、同様の形状の住居跡2軒が調査されており、それとの比較でも、塙之内式～加曾利B式期であることが予想される。6号配石との時期差などの関係も問題とされるところであるが、調査時には、切り合い関係がある、というより、敷石、配石のレベルや位置から、並存していたのではないかという印象を受けた。配石と住居が混然一体としている例は、大泉村姥神遺跡にも見られる。今後、詳しく遺物を検討した上で再度、報告したい。

16号住居（図版38）

Q14グリッドに位置する。径4m程の円形の住居跡で炉址が残る。床面には遺物が殆んどなく、時期は決め難い。状況証換から中期末葉とのみ推測できる。床面からは、5cm程の小さな石棒が出土している（図版48）。

25号住居（図版38）

R14グリッド。径4m程の円形のプランをもつ。出土遺物、埋蔵より、中期末葉（曾利式IV～

V期)の住居跡と推測される。(図版46)

34号住居(図版39)

T14グリッド。本遺跡のなかで最も注目される遺構が、この住居跡である。3.5~4m程の環状に石を配し、中央にかをもつ住居跡で、北側は、石が1m程離れて二重にめぐっている。かは一部、土坑により破壊されている。出土遺物より、中期木葉(曾利式IV~V期)の遺構であると推定される。環状に巡らせた石の中には、磨石、円石が20個程含まれており、その他、丸石、ハチノス石、石皿片、石棒片などもみられる。図版上方には埋甕(図版46)があり、恐らくこの方向が住居出入口にあたると思われる。炉石は火熱のため破砕しているが、焼土は僅かしか検出されなかった。住居跡内にある土坑(図版45)は、炉を破壊していることから、住居跡より新しいと考えられるが、土坑出土の上器との時期差は殆んど無い。土坑覆土には、炉石が含まれておりますり、炉石の出土状況から或いは土坑を埋め戻した土が、時間の経過と共にしまっていくなかで、かが崩れていったとも考えられる。そうなると土坑の方が古いということになる。出土遺物などを詳しく検討した上で改めて報告したい。

3 土 坑

縄文時代と考えられる土坑は数多く検出されたが、ここでは、遺物を出土し、墓壙と推測されるものにつき報告したい。

2号土坑(図版40)

E5グリッド。黄褐色層を掘り込み、黒褐色土の覆土で埋められた土坑で、平石、土器片が出土した。土器片は後期初頭のものである。

3号土坑(図版40)

E5グリッド。2号土坑を切る形で隣接している。同じく土器片と石が出土した。土器片は後期初頭のものである。2、3号土坑共、遺物も石も土坑の底よりやや高い位置で出土している。

85号土坑

336号土坑(図版41)

縄文時代中期末~後期初頭にかけての土坑で、336号土坑は、半らに割った安山岩、丸石などが土坑の底に敷いてある。

344号土坑（図版42）

上坑片側から石を投げ入れてあるよう見える。縄文時代中期末の上器1/4個体程が、その石の上で出土した。石の中には、扁平の丸石などが含まれている。土坑は5層に掘り込んであり、覆土は4層と同じ暗褐色土であった。

339号土坑・349号土坑（図版43）

339号土坑は、336号土坑の傍にあり、同じく平石が底に敷かれたように置いてある。縄文時代後期初頭の上器片が出上している。

349号土坑は、底に石が無雜作に積み込まれている。中にハチノス石が含まれていたため、縄文時代の土坑にしたが、土器は出土しなかった。浅い上坑で、5層にまで掘り込んでいない。

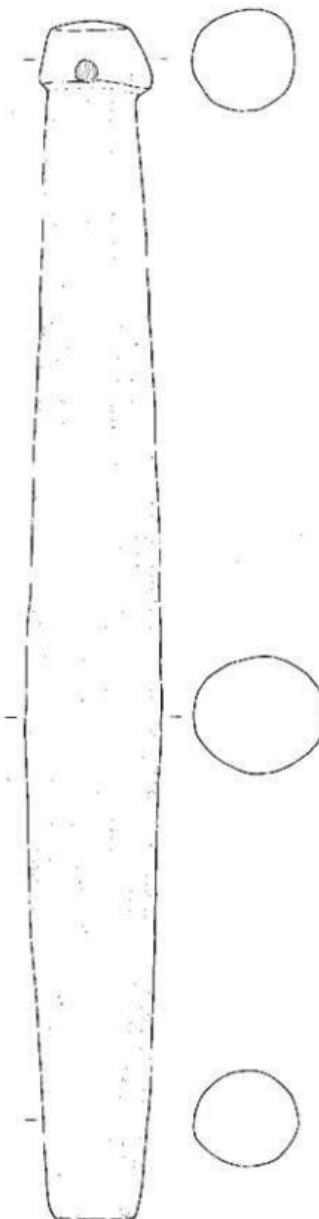
350号土坑・352号土坑（図版44）

350号土坑も349号土坑と同じような土坑で、近接して位置する。ハチノス石が含まれており、縄文時代の土坑としてある。

352号土坑には土器半個体が含まれており、縄文時代中期末の土坑と思われる。

34号住居内土坑・34号住居南土坑（図版45）

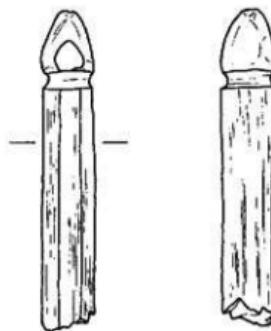
34号住居内外で、縄文時代中期末（曾利IV～V式）の土坑が検出され、



第46図 遺跡周辺出土石棒(1/6)

土器が多く出土している。図版45上は、34号住居内で検出された。炉北側に接しており、炉の一部が土坑に崩れ落ちている。土坑は3基に分かれているが、34号住居より新しいものと古いものとがありそうである。

34号住居の南側で検出された土坑は、底部を欠損した土器一個体が含まれていた。人骨は出土していないが、被葬葬上坑と考えられるかも知れない。



4 出土遺物

土器（図版46・47） 図版46—1は、Q19グリッドより出土した中期初頭（五箇ヶ台式）の台付鉢である。胎土は金雲母を多量に含む粗目の土で、本遺跡出土の同形式の土器に共通している。

図版46—3は、25号住居跡より出土した埋甌である。ハの字形の横目沈線に、幅広の蛇行懸垂文をもつ。曾利III～IV式に相当すると思われる。

図版46—4は34号住居跡埋甌である。ハの字形に沈線による真直ぐな懸垂がつく。口縁部は欠損しているが、曾利IV～V式の土器と思われる。

図版47—1は、3号配石東側の土坑（171号土坑）より出土した中期終末期（加曾利E4末）の土器で、無筋繩文を縱方向に転した地文に幅広の降帯2本の懸垂がつく。口縁部、口唇部上面には刺突がめぐる。

図版47—2は、9号配石と14号配石の中間より出土した深鉢で、後期初頭（棚之内I式）のものである。

その他

図版48—1は、遺跡調査区の西側の畑に、貯水槽を埋める際に出土したという石棒で（第46図）北組集落の深沢古元氏が保管している。出土位置から屋敷添造跡に達なることは間違いない、参考までに報告しておく。長さは118cm、最も太い部分は径13cmで安山岩製である。この畑一帯の表面採集では中期末葉（曾利III～V式）の上器片が多く見つかっており、この石棒も中期

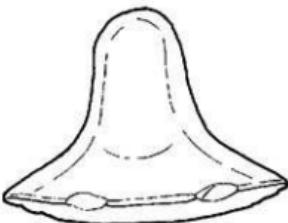
末のものと予想される。完形品であり、かなり長いものなので興味ある資料となろう。

2は、16号住居跡より出土した小型の石棒片で（第47図）、現存長5.6cmである。石質は不明。表面には磨いて加工した痕がみられる。炉址より1m程西に寄った床面と推定される高さで出土した。

3は、6号配石の北寄りの部分で出土したスタンプ型土製品で（第48図）スタンプ部の長軸は、5cm、高さは3.8cmである。県内では、金生遺跡、青木遺跡に出上例がある。胎土は肉眼で観察するところでは在地のものと推測される。

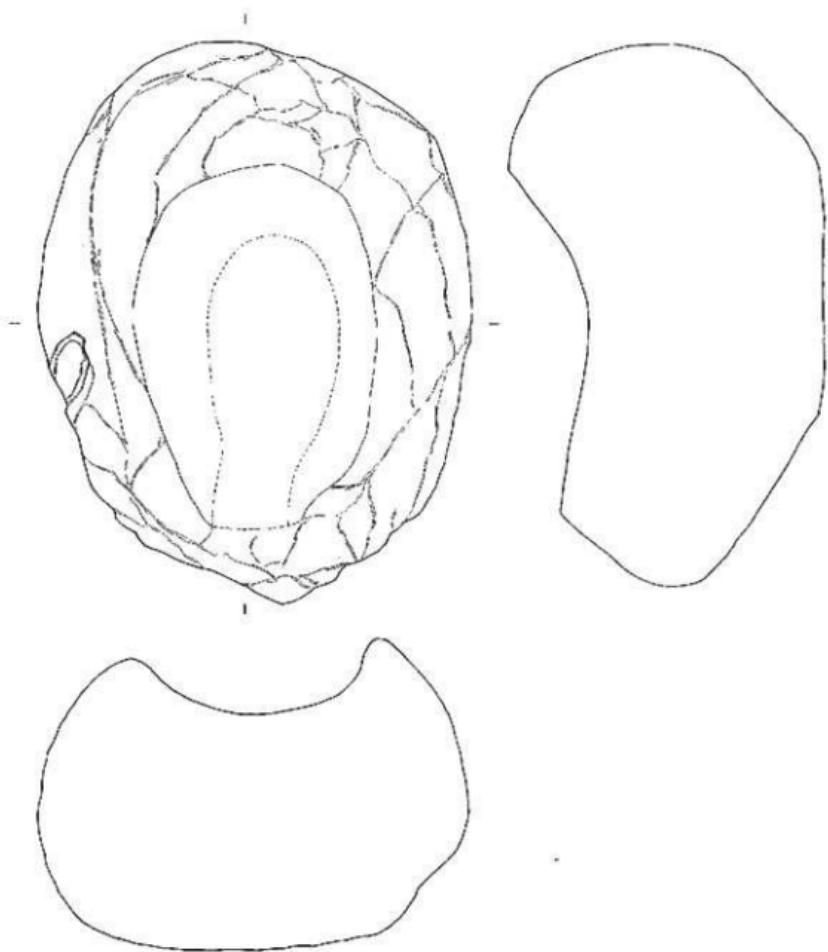
4は、9号配石の下部根石状に並べられた石に使われていた石皿（第49図）で長さ56cm、幅43cm高さ38cm程の大きなものである。安山岩製で、加工はほぼ完形までにしてあるが、凹凸が多く、仕上げをしていない様子である。磨面は、使用した痕が全く無い。

非常に重く、1人でやっと宙に浮かすことができる程である。

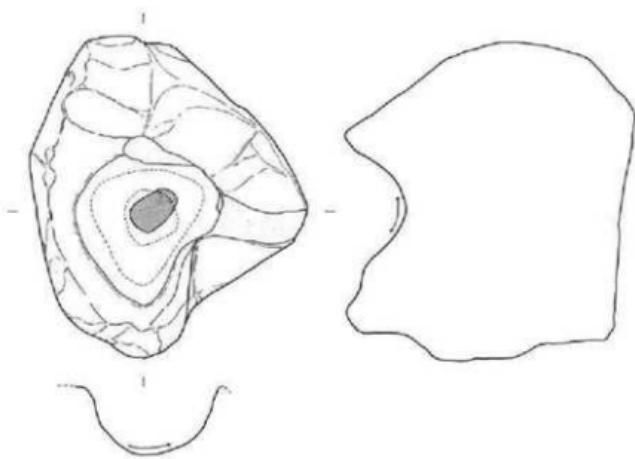


第48図 6号配石出土スタンプ形土製品（1／1）

5は、6号配石から、遺跡南側に現在も流れている川に傾斜する斜面で出土した巨大な石皿である（第50図）。試掘調査の際、既に地形が改変され、遺物も出土しないことから、調査区に含めなかったのだが、調査終了後の圃場整備工事の際、重機により掘り出された。出土状況の詳細は不明だが、遺跡が位置する尾根から、川に下る南斜面のどこかに掘えられていたと思われる。掘り出した直後の石皿は、石下部に黄褐色の粘性をもった砂が付着しており、元来あった石をそのまま石皿に加工して使用していたものと考えられる。長さ90cm、幅73cm、高さ77cmで、磨面の深さは15cm、安山岩製である。定置式の石皿は類例があることや、磨面は明らかに使用され、滑らかになっていること、磨面の形状が縄文時代の石皿と共通することから、縄文時代の遺物として報告しておく。



第49図 9号配石出土石皿 (1/6)

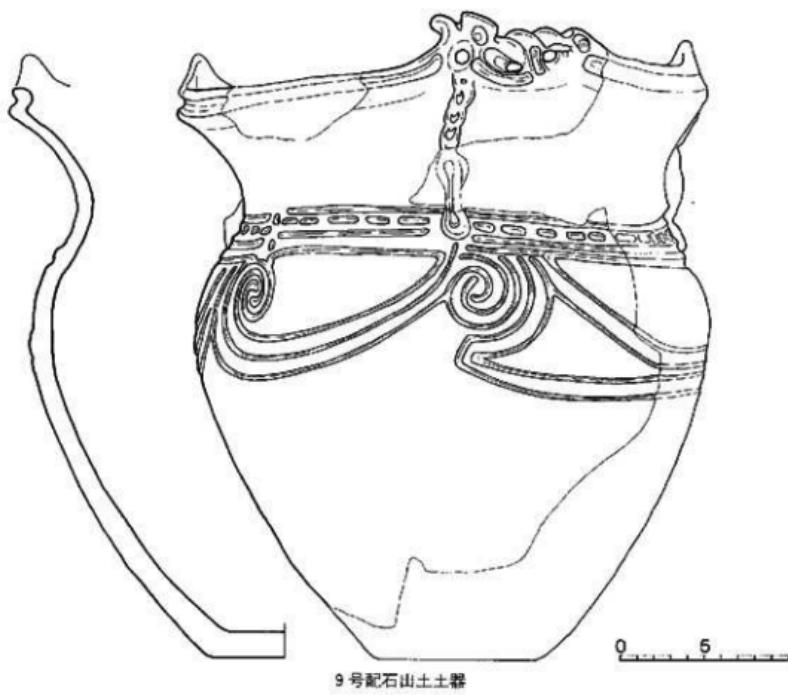


第50図 造跡尾辺出土石皿 (1/15)

参考文献

- 雨宮正樹、山下孝司、柳原功一 「山梨県高根町青木遺跡調査概報」『山梨県考古学協会誌』
2 1988
- 柳原 功一 「姥神遺跡」大泉村教育委員会 1987
- 木本 健 「金の尾遺跡・無名墳」山梨県埋蔵文化財センター・調査報告 第25集 山梨
県教育委員会 1987
- 長崎元広ほか 「山梨・長野における縄文時代中期後半の土器編年」 中部高地縄文土器集
成グループ1980
- 新津 健ほか 「金生遺跡Ⅱ」山梨県埋蔵文化財センター・調査報告書第41集 山梨県教育委
員会 1989
- 宮沢 公雄 「清水端遺跡」明野村教育委員会 1986

写真図版



9号配石出土土器



遺跡周辺航空写真（○印が遺跡の中心域）



屋敷添遺跡遠景（西方、藍崎市より臨む）



遺跡近景 (F4グリッド～H7グリッドの辺り)



遺跡近景 (B8グリッド～E10グリッドの辺り)



3号住居跡



0301



0302



調査風景



調査風景



4号住居跡



遺物出土状況（カマド右側）



カマド



0401



0402



6号住居跡



6号住居跡カマド



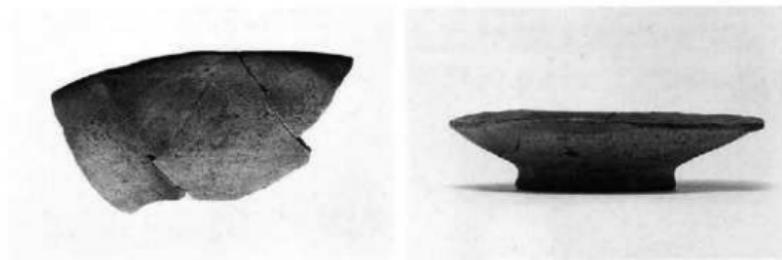
7号住居跡



0701



0702



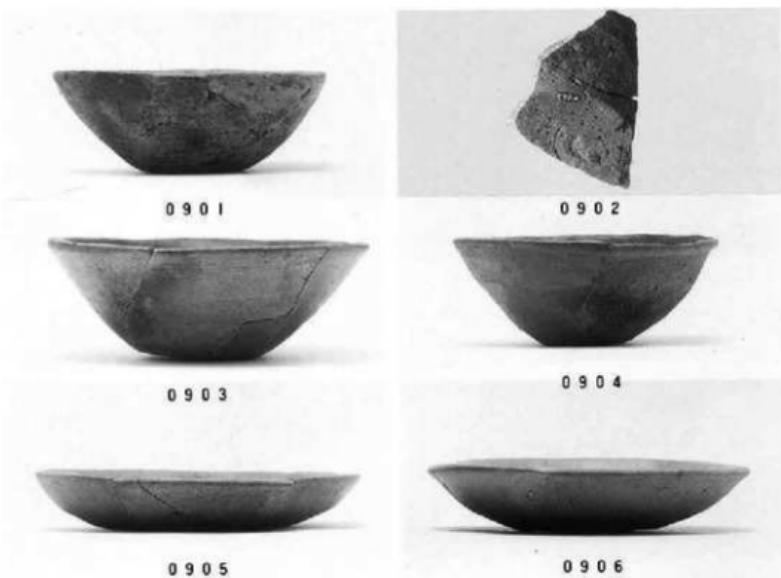
0703

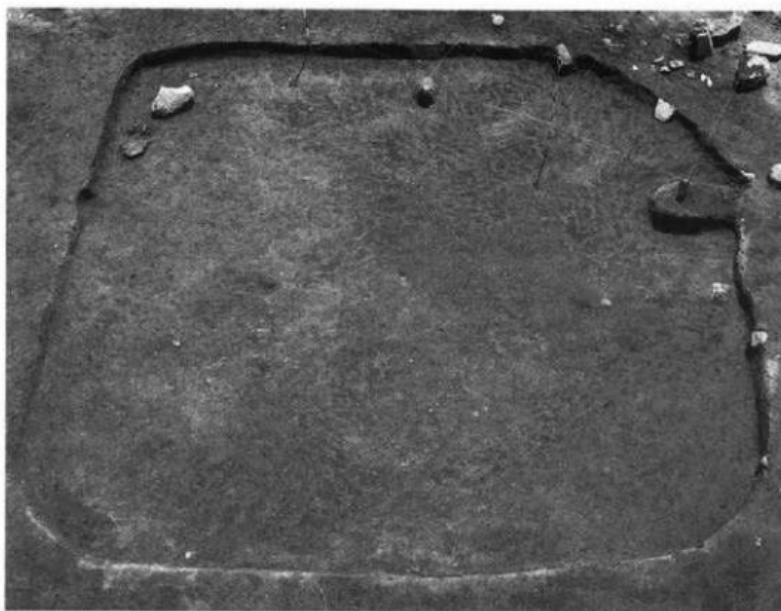


0704



9号住居跡





10号住居跡 (左上がカマド)



カマド辺遺物出土状況



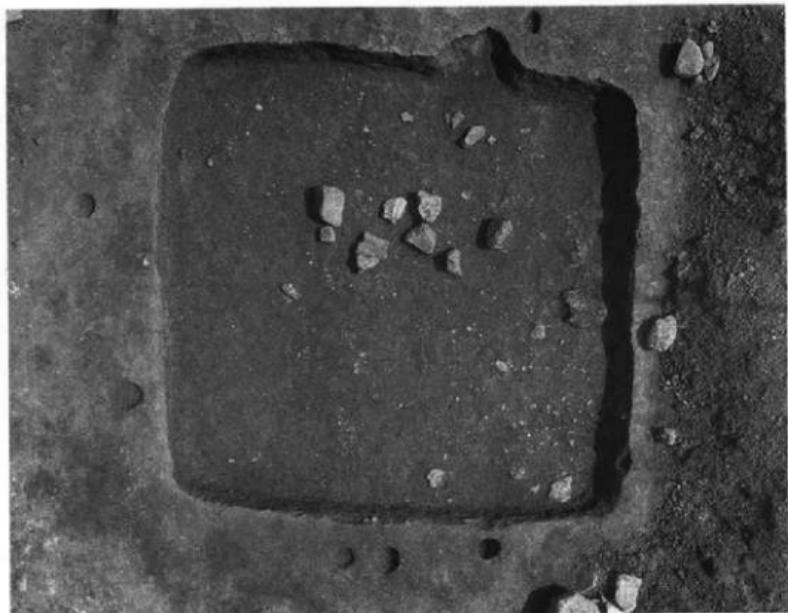
1001



1002



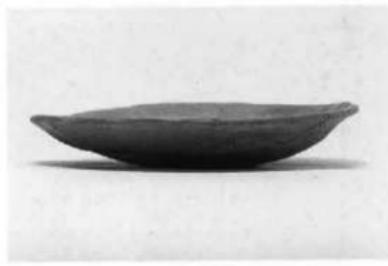
1003



12号住居跡



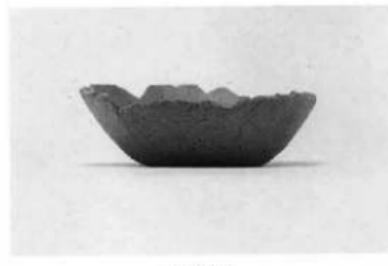
1201



1202



1203



1204



13号住居跡



遺物出土状況



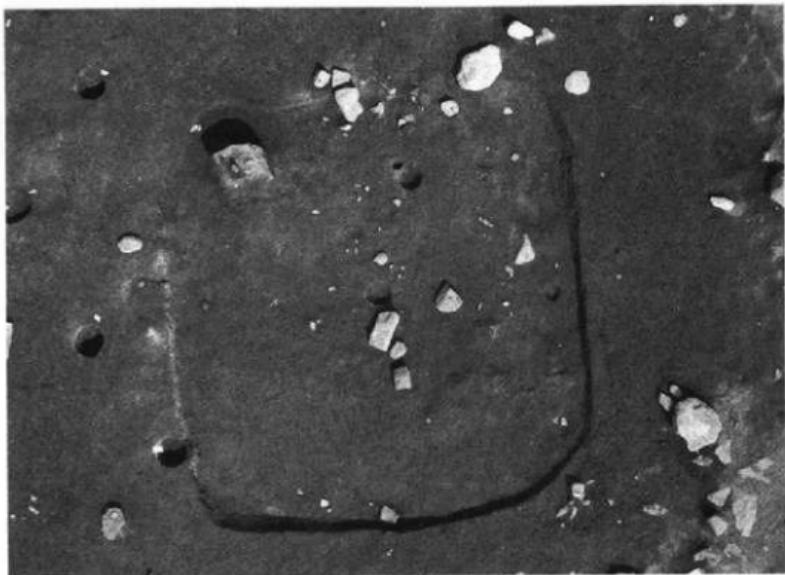
カマド



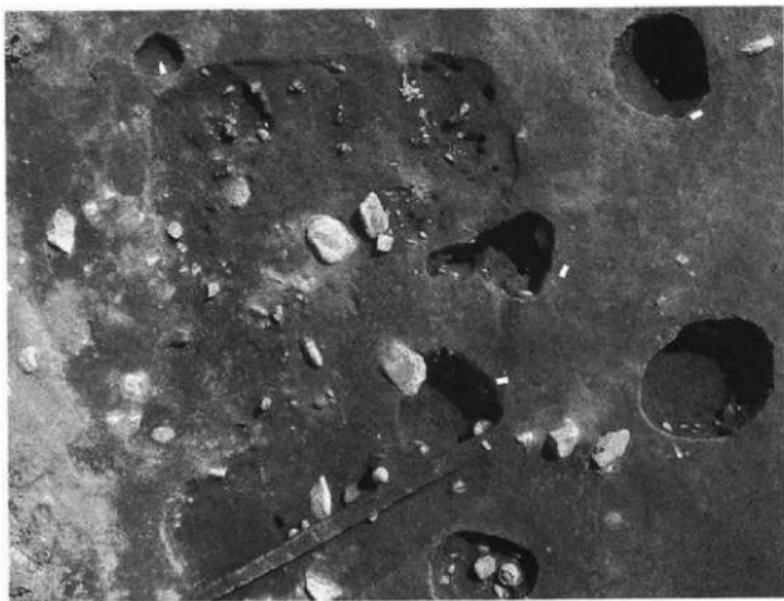
1301



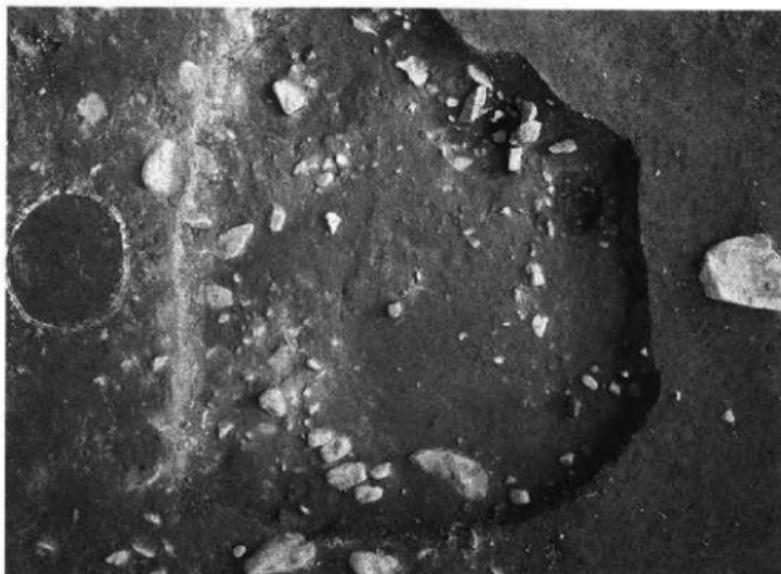
1302



14号住居跡



15号住居跡及び矩形竪穴状遺構



17号住居跡



1503



1701



1702



1703



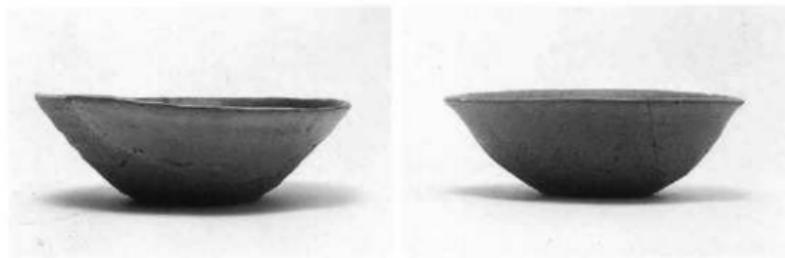
1704



1705



20号住居跡



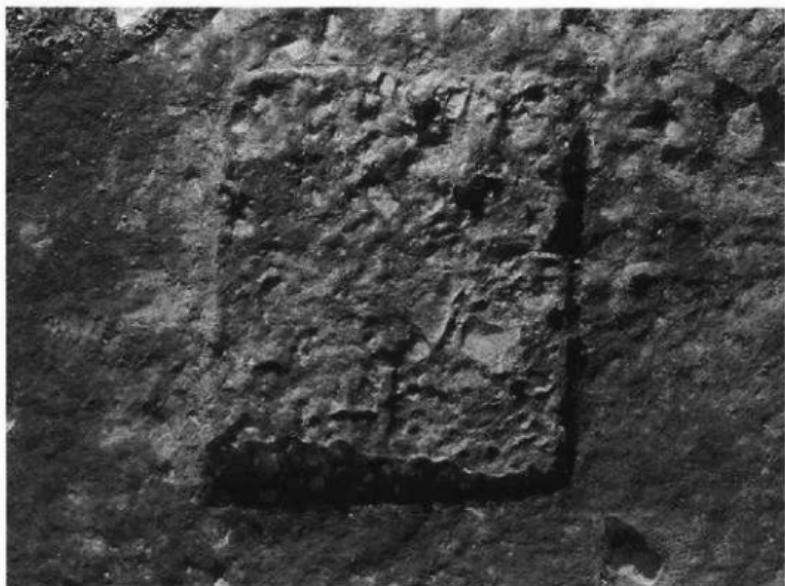
2001

2002



2003

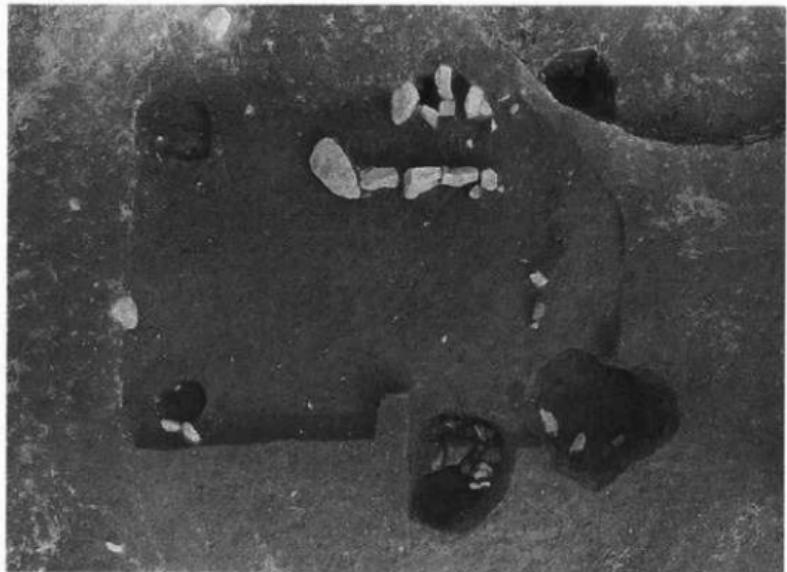
2004



19号住居跡



21号住居跡



22号住居跡



17号住居跡カマド



同左カマド内石皿出土状況



20号住居跡カマド



22号住居跡カマド



23号住居跡



カマド辺遺物出土状況



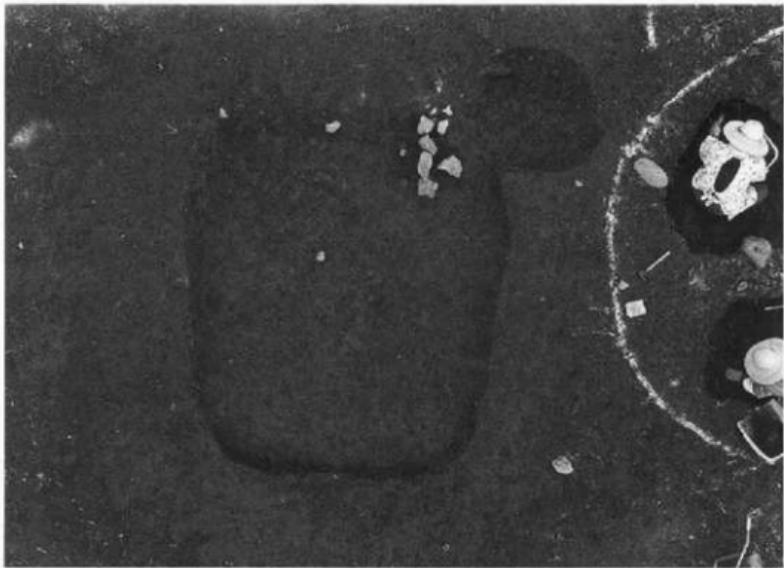
カマド



2301



お弁当の時間



24号住居跡



2401



2402



2403



2404



27号住居跡



カマド



2701



2702



骨が出た？



28号住居跡カマド集石



2801



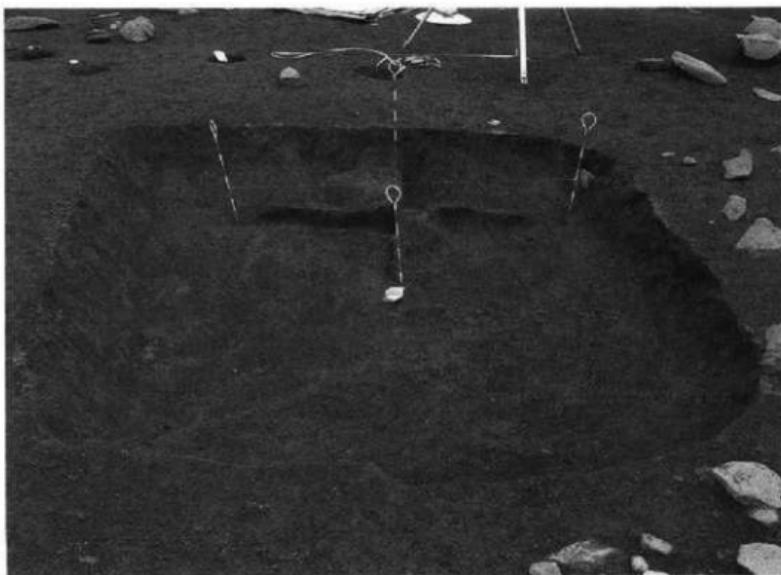
2802



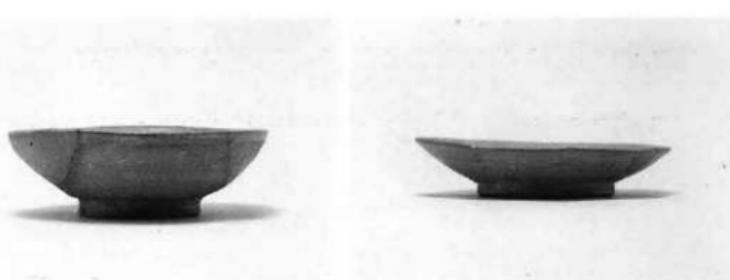
2803



2804



方形竖穴状遗構



12号烧土遗物

3101



石包丁(表)



石包丁(裏)



C 7-0 1



C 7-0 2



C 7-0 3



K 12-0 1



K 12-0 2



K 12-0 3



K 12-0 4



石仏移築前の御詠



I号配石



配石内出土石皿



同 左



配石内出土ハチノス石



同 左



2号配石



2号配石の石棒を立てて復原してみた



3号配石



配石内石組



配石内石組



配石下の敷石



4号配石



4号配石(反対側より)



配石内出土石皿片



配石内出土石棒片



同上石皿片



6号配石



配石内出土土器



配石内石棒と丸石



配石内出土石皿片



配石内出土黑曜石



8号配石



配石内出土ハチノス石



同 凹み石



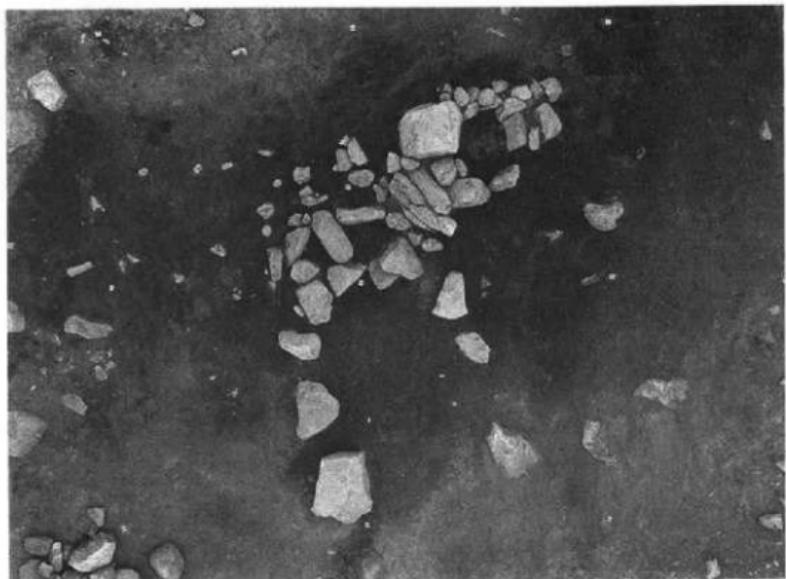
同 擦り石



同 丸石



9号配石



10号配石（6号配石下）



11号配石



12号配石



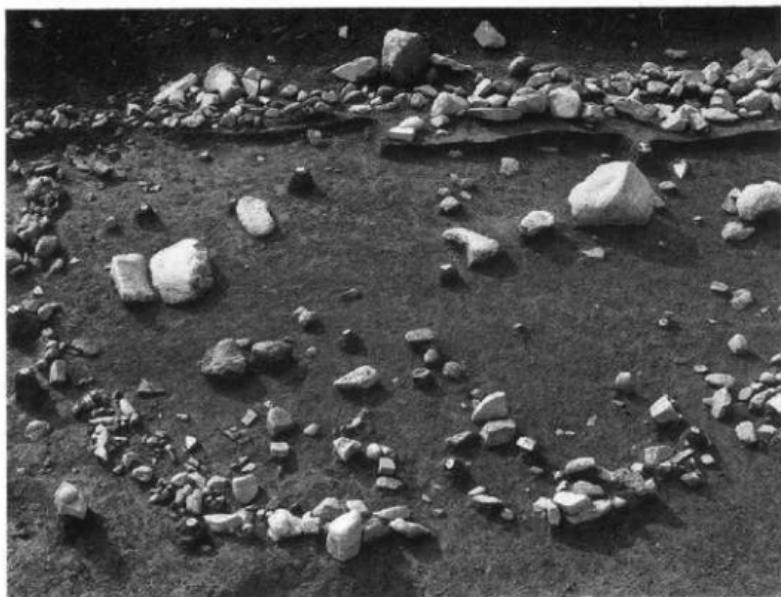
13号配石



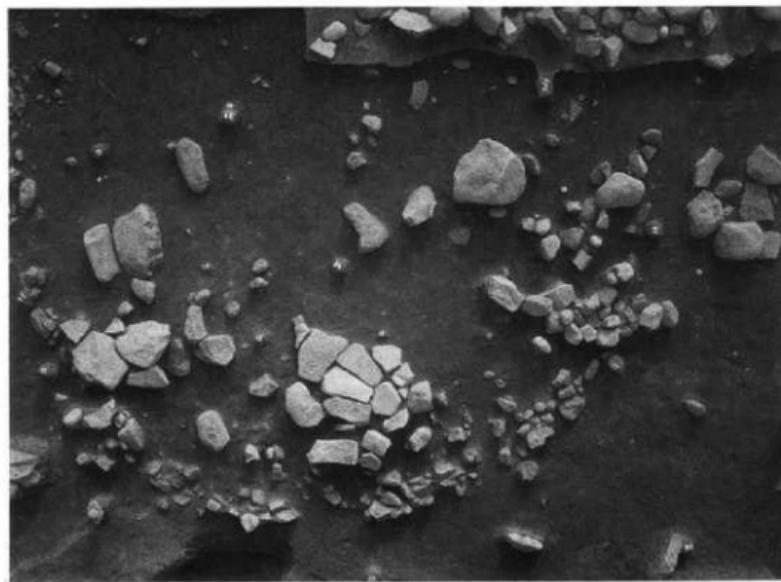
14号配石



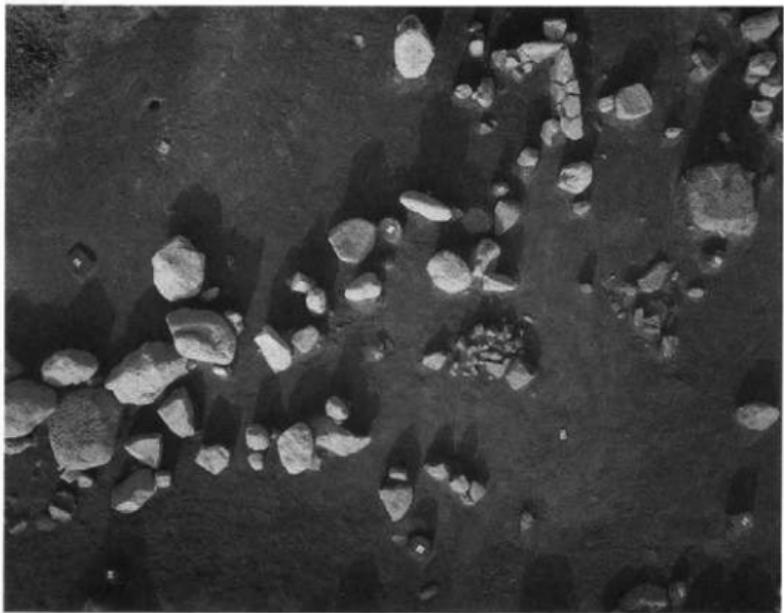
配石と敷石 (2号敷石住居)



環礫造構



同上俯瞰写真



16号配石（右上）、17号配石



17号配石内出土石棒片



同左団み石



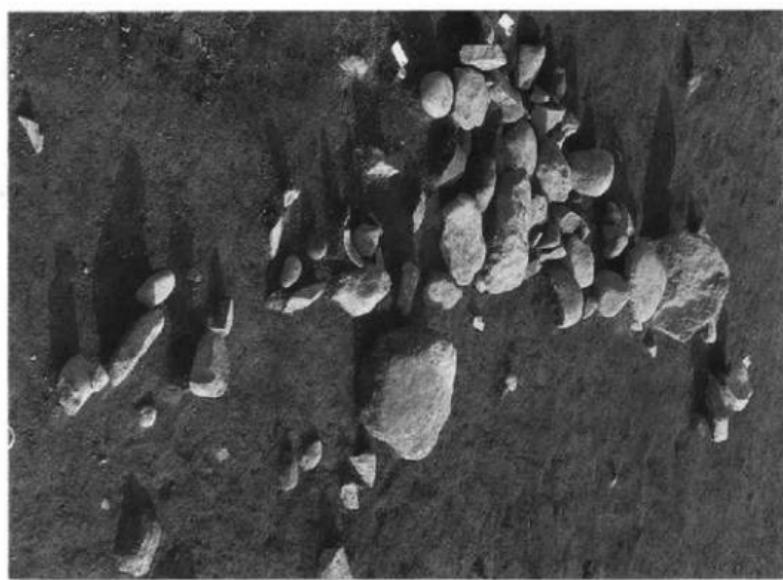
同上 石 鍤



同上注口土器片



19号配石



20号配石



I号石住居



敷石本体部



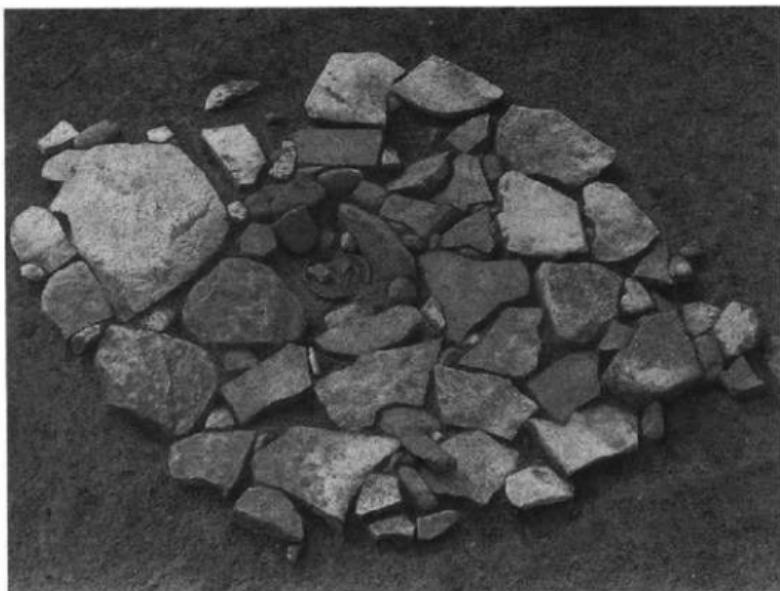
同上 柄部



同上 炉



炉内出土土器



2号石住居



炉内出土土器



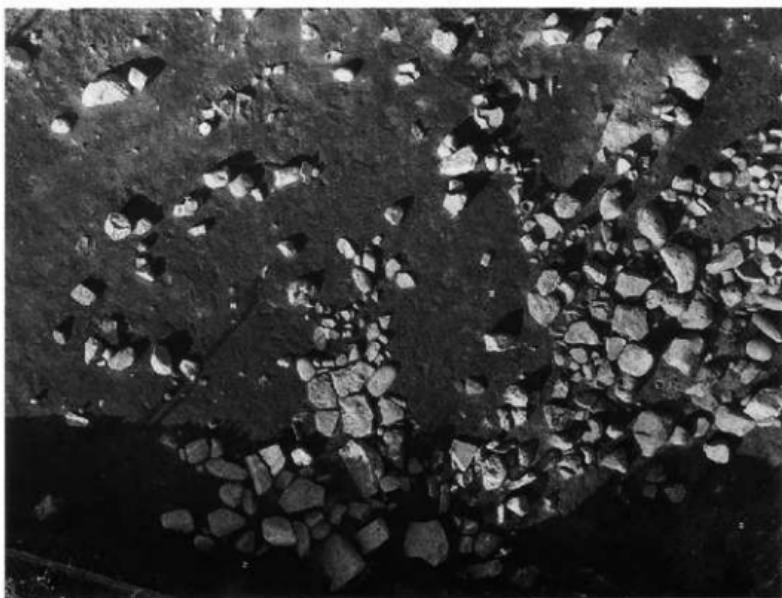
同上 炉



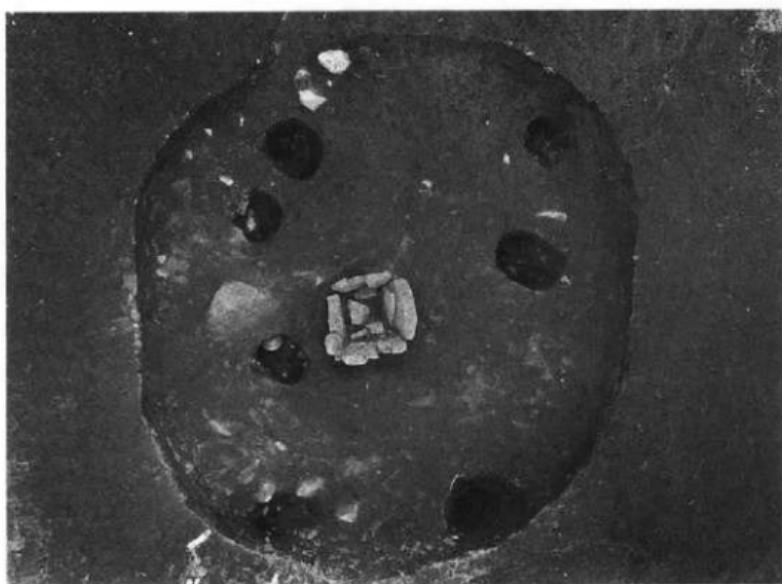
炉半截写真



3号敷石住居



11号住居(右は6号配石)



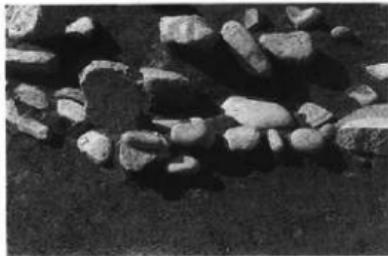
16号住居



25号住居



34号住居



石列内の石器類



同上



石列内出土土器



2号土坑



3号土坑



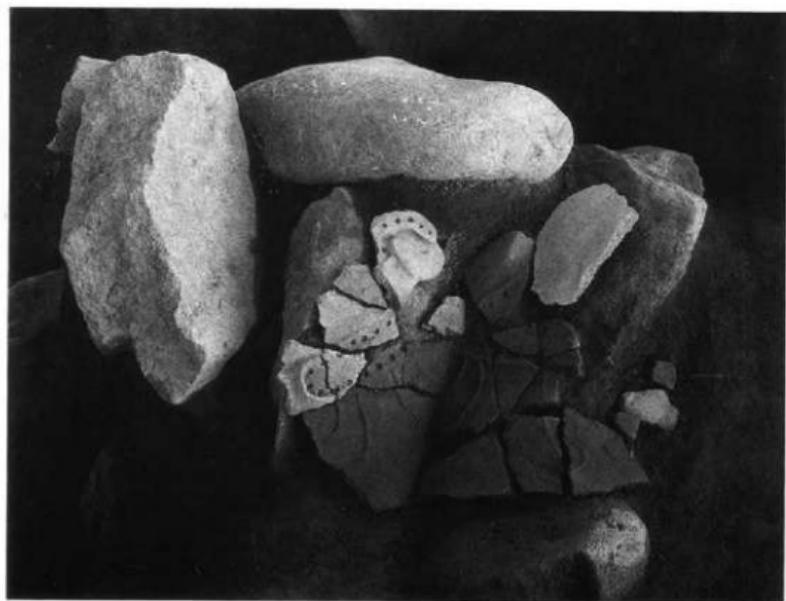
85号土坑



336号土坑



344号土坑



同上土器出土状况



339号土坑



349号土坑



350号土坑



352号土坑



34号住居内土坑



34号住居南土坑



1 縄文時代中期初頭の土器



2 縄文時代中期末葉の土器



3 25号住居埋甌



縄文時代中期末葉の土器

4 34号住居埋甌



1 桶文時代中期末葉の土器



同左出土状況



2 9号配石出土土器



縄文時代後期初頭～中葉の土器

3 6号配石出土土器



1 深沢氏保管の石棒



2 16号住居出土石棒



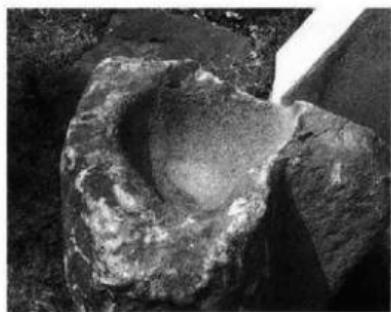
3 6号配石出土スタンプ形土製品



5 調査区域外出土の石皿



4 9号配石内出土石皿



同上擦り面



同上擦り面



調査区域内の石造物



同 左



調査参加者

明野村文化財調査報告 7

屋敷添

1993. 3. 31 発行

発 行 明野村教育委員会
岐北上地改良事務所
印 刷 神吉ようせい

